

タイニーリップス

ガルウーガ

【登場人物】

絵理沙・エルマン（13）

異星人と地球人の間に生まれた女の子

カール・エルマン（38）

絵理沙の父、異星人

香織・エルマン（39）

絵理沙の母、地球人

ジョセフ・エルマン（72）

絵理沙の祖父、異星人

恭子・エルマン（35）

ジョセフの娘

メルーサ（39）・・・国際テロ組織の一員

バロウズ（55）・・・国防総省大佐

森村（32）・・・女性キャスター

小林（45）・・・男性キャスター

山崎（28）・・・お天気お姉さん

山下（13）・・・絵理沙の同級生

玲奈（13）・・・絵理沙の同級生

茉奈（13）・・・絵理沙の同級生

○カール家・リビング（朝）

広々とした明るいダイニングキッチン
リビングルーム。
観葉植物に穏やかな朝日が差し込み、
その奥で主のカール・エルマン（38）
がパジャマ姿のままテーブルに着き、
ゆったりと朝食を取っている。
植物の葉に隠れ、顔は見えない。
テレビからはいつもの朝のニュースが
流れている。

○同・テレビ画面（朝）

淡々とニュースを伝えるベテランアナ、
小林（50）。

小林「昨日未明、日本海沖に着水したと見ら
れる飛行物体、果たして某国が発射したミ
サイルなのか、それとも近年、目撃が多発
しているUAPなのか。一部関係者の間で
は国際的テロ組織、カイザーの関与も否定
出来ないとの声も囁かれています」

○同・リビング（朝）

キッチンからトーストと目玉焼きを手
に妻の香織（39）がやって来る。
香織「カイザー。最近あちこちで聞くわね」
カール（声）「ああ」
香織「やーね、物騒な世の中になって」
と、娘の絵理沙（13）が寝ぼけ眼で
入って来る。

絵理沙「お早う」

香織「あ、お早う」

カールも声を掛ける。

カール（声）「お早う、絵理沙」

が、絵理沙、カールに目を向けた途端、
ハッと息を呑む。

絵理沙「お父さん！」

カール「ん？ どうしたの？」

納豆を山盛りに掛けたご飯茶碗を手
に笑顔で絵理沙を見つめているカール、
その姿はどう見ても人間ではない。

緑色の皮膚に大きな目玉と口、まるで南米に生息するソバージュ猫目ガエルそのもの。

しかも手には水掻きまである。

絵理沙「・・・」

絵理沙、愕然として訊ねる。

絵理沙「どうしていつも納豆ご飯なの？」

カール「・・・えっ？」

絵理沙「毎日毎日同じものばっか」

カール「ああ、飽きないよねえ、コレ」

絵理沙「そうなの？」

カール「それに朝からパンだとね、なんだか

力が出ないんだよ。日本人だから、僕」

絵理沙「日本人は関係ないと思うけど」

絵理沙、トーストをかじりながら何事もなかったかのように席に着く。

トマトジュースを置き、香織が諫める。

香織「こら、行儀悪いわよ」

絵理沙「はい」

絵理沙、生返事でテレビに目を向ける。

同・テレビ画面（朝）

女性アナ、森村（32）に画面が切り

替わる。

驚きの表情と共に、彼女は伝える。

森村「またまた現れました。今世間で話題の

ヒーロー、タイニーリップス。今度は大雨

で決壊した堤防をなんとたった一人であっ

という間に修復してしまいました」

同・リビング（朝）

思わず目を輝かせる絵理沙。

絵理沙「えっ？ また出たの？」

同・テレビ画面（朝）

森村「河の様子を見に行っていた近所の老人

が一部始終をスマホで撮影していました。

その時の映像です」

画面が切り替わり、土手からだくどくと水が流れ出る河の映像になる。

ふいに老人の叫ぶ声。
老人（声）「なんだありや！」

声と共に上方へ向けられる画面。

空中に大きな岩が浮かんでいる。

岩の下に豆粒ほどの人影が見える。

ズームする画面。

ブレた画像で、マントとマスクを着けた男が、岩を持ち上げ空を飛んでいる様子が写し出されている。

そして次の瞬間、男が決壊した土手に向かってひよいと大岩を投げ入れると、大きな水しぶきと地響きを上げ、流れ出る濁流はぱったりと止まる。

男がどこかへ飛び去って行ったところで映像は終了する。

○同・リビング（朝）

目を丸くし、声を上げる絵理沙。

絵理沙「嘘！ フェイクじゃないの？ これ」

カールは興味なさそうに納豆ご飯を口に運んでいる。

○同・テレビ画面（朝）

画面は小林、森村両アナに切り替わる。

小林「感心したように森村に質問する。

小林「彼がタイニーリップスさんですか」

森村「そのようです」

小林「凄い怪力の上、空まで飛んでいましたが、一体何者なのでしょう？」

森村「全く分かっておりません。少なくとも人間ではないと思います」

小林「そうですか。しかし、洪水が治まったのはいいのですが、あの大岩、どうやってどけたらいいんでしょうか？」

森村「そこですか？」

小林「それに、映像を撮っていたあのご老人。

どうしてお年寄りはすぐに河の様子を見に行きたがるのですかね？」

森村「そっちですか？」

○同・リビング（朝）

絵理沙「やだ、ボケとツツコミの応酬をやってる」

○同・画面

真面目な顔で小林が語り掛ける。

小林「さて皆さん。大雨の後は危険ですので、くれぐれも不要不急の外出などせぬよう、私からもお願いいたします」

画面が切り替わり、お天気お姉さんの

山崎（28）が元気に現れる。

山崎「続いて、お天気です！」

○同・リビング（朝）

絵理沙「えっ？ もう終わり？ 肝心のタイニールリップスの話はどうなったの？ 一体何者なの？ アレ」

隣りでカエル男のカールは興味なさそうにお茶を飲んでいる。
と、肌色のゴム状の物体を手にも、香織がやって来る。

香織「お父さん、着ぐるみ洗濯しておいたわ。そろそろ着替えたら」

カール「ああ、ありがとう」

香織から着ぐるみを受け取り、カールは奥の部屋へと消えて行く。

それを見届け、ふいにコソコソと香織に話し掛ける絵理沙。

絵理沙「お母さん」

香織「ん？ なに？」

絵理沙「お願いだからお父さんの着ぐるみ、私の服と一緒に洗わないでくれる？」

香織「なんで？」

絵理沙「だって、何となく納豆臭くなりそうなんだもん」

香織「何言ってるの。お父さんは私たちの為に、毎日生懸命働いてくれているのよ」

絵理沙「でも、なんかやなの」

香織「駄目よ、そんな事言っちゃ」

絵理沙「にしてもお父さん、今何してんの？」
香織「言ったでしょ、転職して念願の新聞記者になったって」

絵理沙「どの記者？ 私、まだ一度もお父さんの記事呼んだ事ないし」

香織「それは・・・、匿名で書いているから」

絵理沙「ホントなの？」

香織「な、何疑ってるのよ」

香織の目が泳いでいる。

絵理沙「ホントはまだ一行も書かせて貰ってないんじゃないの？」

香織「ちよつと絵理沙。そんな事を言ったら

お父さん傷付く・・・」

絵理沙「ほーら、やっぱそうなんじゃ・・・」

と、奥のドアの開く音。

香織、慌てて絵理沙の耳元で囁く。

香織「今の話は内緒よ」

スーツに着替えたカールが部屋から出て来る。

カエル男からすっかりイケメンの白人男性に変身している。

涼しい眼で、キラリと白い歯を光らせ

カールは二人に声を掛ける。

カール「じゃ行ってくるよお母さん、絵理沙。

・・・さあ、今日も取材だ」

ニッコリ微笑み、香織が答える。

香織「行つてらっしゃい、あなた」

スマホを弄りつつ絵理沙も返事をする。

絵理沙「行つてらっしゃい」

と、慌ててカールに走り寄る香織。

香織「あっ、お父さん、ちよつと待って」

香織、カールのネクタイを直し、

香織「ネクタイが曲がつてる。それから」

カールの顎に目を移す香織。

顎の下が少し弛んでいる。

香織「着ぐるみ、ちよつとズレてるわよ」

香織、カールの顎の下をギュッと引っ

張り、しわを伸ばす。

カール「ああ・・・、うっかりしてたよ」

思わず照れ笑いを浮かべるカール。

そんな二人を横目に、絵理沙は黙々とスマホを弄っている。

○絵理沙の中学校・全景

校舎に鳴り響くチャイムの音。

○同・絵理沙のクラス

女性教師Aが教室を歩きながら、井伏鱒二の「山椒魚」を朗読している。生徒らは皆、その声に耳を傾けつつ、国語の教科書に目を落としている。生徒の中に絵理沙もいる。が、彼女は教科書の中にスマホを隠し、こっそり検索をしている。画面に次々とスクロールされる「タイニーリップス」の画像。どの画像も小さい上にボケている。が、一枚だけ鮮明な画像が現れる。マスクとマントの男がどこかの園児らとVサインで記念写真に写っている。しかしよく見るとマスクはヨレヨレ、ユニフォームとマントはボロボロ。思わず呟く絵理沙。

絵理沙「マジ？　これがタイニーリップス？
随分くたびれたヒーローね」

と、ふいに聞こえて来るヒソヒソ声。

声「おい・・・おい」

隣の太った男子、山下（13）が声を潜め、絵理沙を諷めている。

山下「見つかるぞ」

ふと山下の顎に目を向ける絵理沙。

肉が弛んでいる。

次の瞬間、教室中に響く山下の叫び声。

山下の声「いてえっ！」

生徒ら、思わず山下に注目する。

教師Aも朗読を止め、振り返る。

教師A「どうしたの？！」

キョトンとした顔で絵理沙が答える。

絵理沙「あっ、いえ。山下君の顎がちよっとズレたので、直してあげようと思って」

顎の下を抑え、山下が叫ぶ。

山下「これはズレてるんじゃない！ 太ってるんだ！」

大爆笑する生徒らと教師A。

が、絵理沙だけはポカンとしたまま、不思議そうに山下を見つめている。

○カール家・玄関（夕）

カチャカチャと響く開錠の音。

ボタンとドアが開き、絵理沙が大慌てで入って来る。

絵理沙「お母さん！ お母さん！」

家の中は電気も消え、シーンと静まり返っている。

○同・リビング（夕）

トボトボと中に入り、明かりを点ける

絵理沙、テーブルの上の「ちよつとお使いに行つて来ます」のメモに気付く。

絵理沙「えーっ？ 出掛けちゃったの？」

思わずふくれっ面になる絵理沙。

絵理沙「何でいないのよ。聞きたい事があったのに・・・」

ブツブツと彼女は呟く。

絵理沙「大事な話があるってのに・・・」

と、ふいに響くドアホンの音。

絵理沙「だれよ、もう」

絵理沙、ふて腐れ気味にモニタを覗く。

画面には朗らかに笑う、人の好さそうな老人が映っている

途端にパツと表情が明るくなる絵理沙、元氣よくドアホンに呼び掛ける。

絵理沙「ダンケッ！」

サムズアップで返事をするモニター内の老人、ジョセフ・エルマン（72）。

ジョセフ「ドクトル・エルマン！」

× × ×

麦茶を手に絵理沙がキッチンからやって来る。

絵理沙「どうぞ、おじいちゃん」

ジョセフ「おお、絵理沙は気が利くね」

ジョセフ、グラスを受け取りソファーにゆったりと腰掛ける。

絵理沙は笑顔で見つめている。

ジョセフ「いやあ、暑い暑い」

と、ジョセフ、麦茶を一口飲むとグラスを置き、矢庭に服を脱ぎ出す。

絵理沙「ヤダ！ 何してんの？」

服を脱ぎ捨て、でっぷりとした上半身が露わになったジョセフ、ふいにボデイルのポーズを取り、得意げに言う。

ジョセフ「どうじゃ、キレてるか？」

笑いながら声を掛ける絵理沙。

絵理沙「デカい！ 仕上がってる！」

更にジョセフ、皮膚までめくり始める。

絵理沙「えっ？ 着ぐるみも脱いじゃうの？」

ジョセフ「いやあ、これは窮屈だな」

中からでっぷり太ったソバージュ猫目ガエルそっくりの老人が現れる。

カエルのジョセフはしみみと呟く。

ジョセフ「ああ、やっぱこの姿に戻るとホツとするのう」

絵理沙「やーね、もう」

絵理沙、笑いながら脱いだ着ぐるみを手に取り、匂いを嗅ぐ。

絵理沙「わっ、カエル臭ーい。おじいちゃん、これ洗つといてあげる」

ジョセフ「ええっ？ この姿じゃ帰れんよ」

絵理沙「今日はお父さんの着ぐるみを着て帰って」

ジョセフ「そりゃいい！ カールのフリして彼女に抱き着いてやるか」

絵理沙「ヤダー！ そんな事したらお父さん、捕まっちゃ・」

絵理沙、突然目を丸くし、

絵理沙「えっ？ おじいちゃん！ また若い

看護師に手を出したの？」

ジョセフ「いやあ、看護師だけじゃないぞ。

色んな女と付き合っとなる。若いから熟女まで、より取り見取りな」

絵理沙「ヤダーッ！ サイテェッ！」

カエルのジョセフ、ウインクしながら舌をビュッと伸ばし、

ジョセフ「女を落とす決め手はな。このハエを取る程長い舌を出して交わす熱いチューじゃ」

絵理沙「もう！ エロジジイ！」

絵理沙、着ぐるみを手に、笑いながら部屋から出て行く。

○同・洗濯室（夕）

絵理沙、洗濯機に着ぐるみを放り込み、ふと思いついたように呟く。

絵理沙「あ、そうだ。ついでに私のも洗っちゃおう」

絵理沙、籠に脱いだ可愛い下着も突っ込み、ポンとスイッチを入れる。

○同・リビング（夕）

麦茶を飲みながらジョセフがしみじみと呟いている。

ジョセフ「いやー、絵理沙もすっかり年頃のムスメになったのう」

ふと振り向くと、絵理沙が真顔でドアの陰からジッと見つめている。

絵理沙「・・・」

ジョセフ「どうしたんじゃ？ 絵理沙」

絵理沙「・・・うん」

ジョセフ「何かあったのか？」

絵理沙「おじいちゃん・・・、ちょっと、聞きたい事があるんだけど」

ジョセフ「聞きたい事？」

絵理沙「・・・うん」

絵理沙、戸惑い気味に口を開く。

絵理沙「男の人って・・・みんなカエルじゃなかったの？」

○同・リビング（夜）

絵理沙がソファーに寝そべり、ボーツとテレビを眺めている。

○同・テレビ画面

戦闘機が猛スピードで空を飛んでいる。バックに流れるハードロック。前方では凶悪な怪獣がビルを壊し、暴れまくっている。

突然、戦闘機から発射されるミサイル。ミサイルは見事怪獣に命中、巨大怪獣は爆炎に包まれる。

が、煙が消えると怪獣はなぜかビキニスタイルの巨大な美女に変わっている。美女はさらに激しくビルを壊しながら、カメラ目線でセクシーに眩く。

巨大美女「ダンケ」

戦闘機には白衣を着た人間の姿のジョセフが乗っている。

同じくカメラ目線でニコリと笑い、サムズアップで答えるジョセフ。

ジョセフ「ドクトル・エルマーン」

と、突然松崎しげるが登場、シャウトで歌い上げる。

松崎「エルマーン、クリニックウツ！」
同時に画面に現れる「美容整形外科、エルマン・クリニック」のテロップ。

○同リビング（夜）

キッチンから香織の声。

香織の声「絵理沙、ごはんよ」

絵理沙は黙ったまま虚ろな目でジッとテレビを見つめている。

○（回想はじめ）同・リビング（夕）

ソファーに深く座り、カエルのジョセフが絵理沙の話に耳を傾けている。

ジョセフ「そうか、絵理沙は今まで男は皆、着ぐるみを着たカエルだと思っと思ったのか」

絵理沙「・・・」

ためらい気味に頷く絵理沙。

大きなため息を吐き、ジョセフは口を開く。

ジョセフ「無理もない。考えてみれば絵理沙は生まれてこの方、周りにいる男といえはわしとカールだけだったからのう」

絵理沙「・・・」

ジョセフ、ふと腹立たし気に、

ジョセフ「だが本当の事をちゃんと説明して来なかったカールにも責任がある。わしや娘が幼稚園の頃にはすでに話しとったぞ」

絵理沙「・・・娘って、恭子おばさん？」

ジョセフ「ああ」

※ ※ ※

(フラッシュ)

血まみれの手術着姿で手にメスを持ち、ニッコリ笑う恭子・エルマン(35)。

※ ※ ※

絵理沙「おばさん、美人よね」

ジョセフ「あいつはな、外面だけはいいんだ。

まあそんな話は置いて、絵理沙ももう中学生なんだし、いい加減真実を知っておかねばいかんのう」

絵理沙「真実？」

ジョセフ「そう」

絵理沙「何？・・・真実って」

ジョセフ「実はな、わしとカールは地球人ではない」

絵理沙「・・・えっ？」

ジョセフ「遠い星からやって来た『異星人』なんじゃよ」

○宇宙

星雲が渦巻く遙かな宇宙。

ジョセフ(声)「今から二百年程前の事じゃ。わしらの故郷、エルマン星が大爆発を起こした」

せん光を上げ、爆発する一つの星。

絵理沙(声)「二百年前？」

爆炎の中から飛んで来る一台の宇宙船。ジョセフ(声)「わしら親子は命からがら脱出をした。そして長い旅の末、地球へとやって来たのじゃ」

絵理沙（声）「じゃ、おじいちゃんの歳って」

○カール家・リビング（夕）

ソファで語るカールのジョセフ。

ジョセフ「正確には五百七十二歳、カールは確か二百三十八歳になるかな？ エルマン星が爆発した時はまだ子供だったからのう、三十五、六の」

愕然とする絵理沙。

絵理沙「三十五、六の子供？」

ジョセフ「ああ、いたずら盛りのな」

絵理沙「・・・」

ジョセフ「じゃが折角水と緑の惑星、地球に辿り着き終の棲家を見つけたと思ったのも束の間、そこに住む人類はサル型人間のみに、しかも彼らと来たら同じ人間同士ですら、ちよつと肌の色が違うだけで諍いを起こすほど排他的な性質をしていた。到底わしらカエル型人間『フロゲリアン』を受け入れて貰えるとは思えなかった」

絵理沙「・・・」

ジョセフ「そこで、わしら親子は着ぐるみに身を隠し、地球人に成り済ます事にした。そしてこの第二の故郷で、それぞれ地球人の女性と知り合い、それぞれ娘を授かった、・・・と言う訳じゃ」

絵理沙「じゃ、恭子おばさんとお父さんは実の兄妹じゃ」

ジョセフ「カールの母親はエルマン星が爆発する前に病いで死んだ。しかし、今思えばある意味その方が幸せだったかも知れん」

絵理沙「・・・」

（回想終わり）

○同・リビング（夜）

カールのカール、香織、絵理沙、揃って夕食を食べている。

ふいに絵理沙、食事を残し席を立つ。

香織「あら、もういいの？」

黙ってリビングを後にする絵理沙。

○同・洗濯室（夜）

絵理沙、トボトボと洗濯機に向かい、中を覗き込む。

リビングから香織とカールの会話が漏れて来る。

香織（声）「あなた、そろそろ着ぐるみを作り替えた方がいいんじゃない？」

カール（声）「ああ、そうだね」

絵理沙、洗濯槽からジョセフの着ぐるみと自分の下着を取り出す。

見ると中にまだ何かある。

絵理沙「ヤダお母さんったら、あれ程頼んだのに、お父さんの着ぐるみも一緒に・・・」

絵理沙、ブツブツ言いながら洗濯機に手を突っ込む。

すると着ぐるみと一緒に出て来る見覚えのあるヨレヨレのマスクとボロボロのユニフォーム。

思わずハツとする絵理沙。

絵理沙「えっ？　これって、園児らと一緒に写ってた・・・」

よく見ると、ユニフォームに点々と穴が開いている。

絵理沙「何これ？　何の穴？」

○同・リビング（朝）

いつものようにパジャマ姿のまま、カールのカールが納豆ご飯の朝食を食べている。

テレビからはいつもの朝のニュースが流れている。

○同・テレビ画面（朝）

煙を上げているビル、その周囲にはパトカーや装甲車が止まり、大勢の武装警官が忙しく現場を走り回っている映像が映し出されている。

その映像をバックに小林アナと森村アナがニュースを伝えている。

小林「昨日、国連ビルで突如正体不明の武装集団による襲撃事件が起こり、警視庁特殊部隊SATとの激しい銃撃戦で現場は一時、騒然となりました」

鳴り響く発砲音、武装警官らがほうほうの体でビルから退避して来る。

と、そこに現れるタイニーリップス、果敢にビルに飛び込んで行く。

森村「しかしその後、いち早く駆け付けた今話題のヒーロー、タイニーリップスの活躍により、事件は無事解決。武装集団は全員逮捕されました」

タイニーリップスに伴われ、手を頭の後ろに回し、ビルからぞろぞろと覆面姿のテロリストたちが投降して来る。

森村「容疑者らは国際的テロ組織カイザーの一員と思われ、現在警視庁が調べを進めております」

すっかり銃弾を浴び、全身穴だらけのタイニーリップス、警官らにテロリストを引き渡すと、速やかに現場から飛び去って行く。
と、ふいに絵理沙の声。

絵理沙（声）「あれ、お父さんなんでしょ？」

○同・リビング

カールの後ろにいつの間にか絵理沙が立っている。

カール「えっ?!」

思わず茶碗を持つ手が止まるカール。

絵理沙「タイニーリップスって」

カール「・・・」

カールの目が泳いでいる。

絵理沙「ダサッ・・・、今話題のヒーローがあんなくたびれた格好してるなんて・・・、私、娘として恥ずかしい」

カール「な・・・、何で分かったの？」

絵理沙「洗濯機に入ってた、穴だらけのユニフォームが」

カール「ええっ?!」

カール、トーストと目玉焼きを手
にキッチンからやって来た香織
に向かい、

カール「おかあさんったら、もう」
香織、ペロツと舌を出し、

香織「ごめんなさい。ついうっかり」

カール「ついうっかりじゃないよ」

香織「あれ、やっぱり弾痕だったのね？・

テロリストに撃たれたの？」

カール「い、いや、警官の方に」

香織「そう、それは災難だったわねえ」

香織、テーブルに皿を置き、コソコソ
と絵理沙に話し掛ける。

香織「バレちゃったか・・・、新聞記者じゃな
いって」

トーストをかじりながら席に着き、何
食わぬ顔で絵理沙は答える。

絵理沙「どうだっていい・・・、そんな事」

カールは気まずそうに納豆ご飯を口に
運んでいる。

テレビからは天気予報を伝える山崎キ
ヤスターの元気な声が聞こえて来る。

黙々と食事をするカールと絵理沙。

ふいに絵理沙、ポツリと口を開く。

絵理沙「お父さん、・・・異星人なの？」

思わずみそ汁を吹き出しそうになるカ
ール。

絵理沙、目玉焼きを口に運びながら、
淡々と訊ねる。

絵理沙「カエル人間『フロゲリアン』なの？」

カール「・・・」

カールの目が泳いでいる。

カール「誰に・・・それを？」

絵理沙「おじいちゃん」

カール「ええっ？・・・親父ったらもう」

カール、すごすごと味噌汁を置き、膝
に手を置き、ジッと絵理沙を見つめ、

改まった口調で話し出す。

カール「これだけは信じておくれ。いずれは
ちゃんと話さなければいけないとは思って
いたんだ」

絵理沙は黙々とベーコンを齧っている。

絵理沙「そっ・・・」

カール「でも、絵理沙にはまだ早いかと」

絵理沙、レタスにドレッシングをドバドバとかけ、言い放つ。

絵理沙「私、もう子供じゃないのよ」

慌てて取り繕うカール。

カール「そうか。そうだったね。そりゃそうだよね」

絵理沙は黙ってレタスを口に放り込んでいる。

カール「ごめんね・・・、今まで黙ってて」

絵理沙、すっかり食事を終え、ポツリと口を開く。

絵理沙「別にいい。お父さんがフロゲリアン

だろうが、ダサダサヒーローだろうが」

カール「・・・」

絵理沙「私には関係ない」

カール「・・・」

絵理沙、そそくさと席を立つ。

絵理沙「ごちそうさまでした」

キッチンからコーヒーを運びながら目を丸くする香織。

香織「あら、もう食べ終わっちゃったの？」

○絵理沙のクラス

ガヤガヤと騒がしい休み時間。

絵理沙は一人頬杖をつき、ぼんやりと考え事をしている。

と、聞こえて来るけたましい笑い声。同じクラスの玲奈と茉奈が山下をからかっている。

玲奈「ねえ、デブ下」

茉奈「デブ下ったら」

イライラと答える山下。

山下「山下だよ！」

玲奈「部活どこ入ったの？」

茉奈「教えてよ、ナニ部？」

山下「うるさいなあ、どこだっていいだろ？」

玲奈「あっ、分かった！」

茉奈「デ・部」

山下「あるか！デ部なんて！柔道部だよ！

柔道部」

玲奈「えーっ？」

茉奈「マジでーっ？」

山下「ああ、男らしいスポーツやってんだ！」

玲奈「で、階級は？」

山下「・・・え？」

茉奈「ナニ級なの？」

山下「さ・・・さあ」

玲奈「あっ、分かった」

茉奈「肥満級でしょ」

山下「聞いた事ないわ！そんな階級！あつ
たらむしろ入りたいわ！」

ゲラゲラ笑う玲奈と茉奈。

居たたまれず絵理沙、山下を指差しな
がら口を挟む。

絵理沙「やめなよ。山下君だって何も好きで
太ってる訳じゃ・・・」

山下「なんだよ！絵理沙」

絵理沙「・・・」

山下「お前まで何気にひどい事言うのかよ！」
絵理沙「・・・」

絵理沙、急に黙り込んでしまい、愕然
と自分の指を見つめている。

ポカンとしながら玲奈と茉奈が訊ねる。

玲奈「どうしたの？絵理沙」

茉奈「大丈夫？」

絵理沙「・・・えっ？」

慌てて手を隠し、誤魔化し笑いを浮か
べる絵理沙。

絵理沙「う、うん、大丈夫大丈夫」

山下「何だよ、みんなしてからかいやがって」
一人わめく山下。

山下「俺はね、好きで太ってんの！」

○高層ビル・外観

都心に建つ高層ビル。

最上階に威風堂々と掲げられている
「エルマン・クリニック」の看板。

○エルマン・クリニック・待合室

大理石に囲まれた立派なロビーにゆったりと並ぶ一人掛けのソファ。それぞれがスマホを覗いたり雑誌に目落したりしつつ、診察を待っている。そんな中、ロビーの端で制服姿の絵理沙が一人、ポツンと立っている。絵理沙は何だか落ち着かない様子。と、コツコツとヒールを鳴らし、颯々と白衣の美女がやって来る。絵理沙、その姿を見掛けるや否や彼女に走り寄り、声を掛ける。

絵理沙「恭子先生！」

やさしく絵理沙に微笑み掛ける白衣の美女、恭子。

恭子「あら絵理沙ちゃん。院長なら今オペの真最中よ」

絵理沙「違うの。今日はおじいちゃんじゃなく、おばさんに用があつて」
恭子「・・・私に？」

○同・再生医療外科

ドアに「再生医療外科」の文字。

○同・診察室内

恭子、表情を曇らせながら絵理沙の手を取り、ジッと見つめている。

恭子、ふとため息を吐き、

恭子「とうとう・・・始まってしまったか」

絵理沙「始まった？」

絵理沙の手には微かに水掻きが出来ている。

恭子「・・・ええ」

絵理沙「始まった・・・って？」

恭子「ひよっとして絵理沙ちゃんは、ずっとこのまま変わらずに行けるかと密かに希望を抱いていたんだけど」

絵理沙「・・・」

恭子「私は絵理沙ちゃんよりちよつと早かったかな、何せ早熟だったから」

絵理沙「どういう事？」

恭子「ほらっ、これ」

絵理沙に自分の手を開いて見せる恭子。

指の間に僅かに水掻きがある。

絵理沙「えっ？ おばさんも？」

恭子「これでも治療して随分抑えているのよ。

患者さんに不安を与えろといけなから」

絵理沙「・・・」

恭子「父から話は聞いているんでしょ？ ・

私の父も絵理沙ちゃんのお父さんも異星人だつて事を」

コクリと頷く絵理沙。

絵理沙「フロゲリアンとか言つてた」

恭子「当然、私も絵理沙ちゃんも半分はその

DNAを受け継いでいる訳よね」

絵理沙「・・・」

恭子「それがどうもね、思春期になると目を覚ますみたいなのよ」

絵理沙「目を覚ます・・・って」

恭子「体に変化が起き始めるのよ」

動揺しつつ絵理沙は訊ねる。

絵理沙「体に変化つて、でも水掻きくらいなんでしょう？ だつてほら、おばさん、他に何ともないみたいだし、美人だし、スタイルもいいし」

恭子「ありがと絵理沙ちゃん。身内の目まで騙せるなんて、美容外科医の本望よね」

絵理沙「・・・どういう事？」

恭子「ねえ、聞いて？ そもそも何で父がエ

ルマン・クリニクなんて始めたと思う？」

絵理沙「・・・」

恭子「私の為なのよ」

恭子、ふいにパソコンのキーボードを叩き始める。

恭子「シヨックを受けないでね絵理沙ちゃん」

絵理沙「・・・」

恭子、マウスをクリックし、フォルダを開く。

モニター上に、ソバージュ猫目ガエル
そっくりの女性の画像が現れる。

思わず息を呑む絵理沙。

ポツリと恭子が言う。

恭子「これ・・・、私なの」

言葉も出ず、愕然とモニターを見つめ
る絵理沙。

○カール家・絵理沙の部屋（夜）

閉じられたドア。

中から絵理沙のすすり泣く声が漏れて
来る。

絵理沙（声）「ヒドイ！　これって史上最悪
の親ガチャじゃない！」

○同・リビング（夜）

カエルのカールと香織が黙々と食事を
している。

ふとカールが香織に訊ねる。

カール「あれ？　絵理沙はどうしたの？」

俯き加減に返事をする香織。

香織「・・・うん」

カール、ふいに表情を曇らせ、

カール「何か、あったのかい？」

香織、無言で立ち上がり、カールにヒ

ソヒソと耳打ちをする。

と、緑色のカールの顔が見る見る青ざ

めて行く。

カール「ええっ？　ついに絵理沙もか？」

香織、黙って頷く。

カール「・・・どうしよう」

香織「どうしようって、今はそつととして
上げるしか」

箸を置きカール、力なく呟く。

カール「やっぱり僕は、間違っていたのかも

知れない」

香織「そんな事、今更言ってどうするの？」

カール「・・・」

香織「二人で決めた事でしょ？」

カール「・・・」

香織「これは、生まれた時から絵理沙が背負わなければならぬ宿命なの」

カール「・・・でも」

香織「絵理沙は初めからそのようにこの世に生を受けたの。だから絵理沙なの。もし、あなたの血を受け継いでなかったら、それはもう絵理沙ではない。ほかの誰かなのよ」

カール「そ、そんな事言っても・・・」

肩を震わせ、子供のようにさめざめと

泣き始めるカール。

カール「ゴメン。ゴメンね、絵理沙」

香織「もう・・・、しっかりしなさいよ。正義のヒーローなんですよ？」

○同・リビング（朝）

穏やかな朝日が差し込むリビング。

カエルのカールがいつものように納豆

ご飯の朝食を取っている。

が、一向に箸は進まない。

テレビからはニュースが流れている。

○同・テレビ画面（朝）

警察から出て来るワゴン車の映像。

ニュースを伝える小林アナの声。

小林（声）「先日、国連ビルを襲撃し、逮捕されたテロリストらの身柄が、昨日検察に送検されました」

ワゴン車に激しく焚かれる報道陣のフラッシュ。

誰が犯人なのか分からぬ程人相の悪い警官だらけの車内の様子が映し出され、後部座席に座った容疑者らの不鮮明な画像がアップになる。

小林（声）「こちらが、容疑者です」

画面はモニター前で解説する森村アナに切り替わる。

森村「驚いた事に彼らは普通の人間ではありませんでした。国際テロ組織、カイザーの手により野獣のDNAを移植され肉体を強化した、いわゆる『改造人間』です」

モニターに犯人のマグショットが映し出される。

森村の声「容疑者の名はルドルフ・ザ・バッファロー。ボブ・ベア。タイガー・ジョー。ヘンリー・ウルフ。ピーター・パンサー。全員かつてカイザーの養成所で訓練を受けた特殊傭兵との事です」

画面に次々と映し出される野牛や熊、虎、狼、豹の姿をした人間の写真。

○同・リビング（朝）

画面を睨み、思わず怒りを露わにするカール。

カール「何で事だ！ カイザーめ、いたずらに人の体を弄びやがって」

と、いつの間にかカールの後ろに制服姿の絵理沙が立っている。

キッチンから入って来た香織、絵理沙を見つけ、嬉しそうに声を掛ける。

香織「あら絵理沙、お早う」

カール「えっ！」

ハツとして振り返るカール。

カール「絵理沙！」

絵理沙は無言でテレビを見つめている。

カール「お・・・はよう」

絵理沙、テレビを指差しポツリと言う。

絵理沙「この容疑者たちも・・、私と一緒にね」

カール「・・・」

絵理沙「人間じゃない所が」

愕然とするカール。

○同・テレビ画面（朝）

森村「検察は犯行の動機や事件の背景など、更に調べを進めて行くもようです」

画面は替わり、山崎キャスターが元気に登場する。

山崎「続いて、お天気です！」

○同・リビング（朝）

絵理沙、淡々と香織に告げる。

絵理沙「行ってきます」

香織「あら、ごはんは？」

絵理沙「知らない」

そそくさとリビングを後にする絵理沙。
それを見たカール、納豆ご飯を手にし
たまま慌てて後を追う。

カール「あっ、絵理沙、ちよっと話が・・・」

ボタンと閉まるドアの音。

カール、トボトボと戻り、香織に茶碗
と箸を手渡し、力なく口を開く。

カール「・・・僕も支度して来る」

○絵理沙のクラス

ガヤガヤと騒がしい休み時間。

絵理沙はぼんやり頬杖をついている。

隣りでは玲奈と茉奈が相変わらず山下
にちよっかいを出している。

玲奈「よう豚まん」

茉奈「豚まんってば」

山下「何だよ豚まんって！ 最早人間ですら
なくなってるじゃねえか！」

玲奈「だって旨そうな頬っぺたしてんだもん」

茉奈「ちよっとそれ、摘まませて」

玲奈、山下の頬を掴む。

山下「ああ、もうっ！」

思わず顔を背ける山下。

ふいに茉奈が背後から山下の胸を揉み
しだき始める。

玲奈「ああこいつ、男の癖に巨乳だ」

山下「ああ、ん、やめてよもう」

思わず身を振じらせる山下。

茉奈「なに悶えてんだよ」

玲奈「やだあ、感じちゃうの？」

玲奈と茉奈、ゲラゲラ笑っている。

見るに見かね、絵理沙が口を出す。

絵理沙「ちよっという加減やめなよ二人とも。
嫌がってんじゃない、山下君」

玲奈「そうじゃねえよ。喜んでんだよ」

茉奈「だってコイツ、DMなんだもん」

山下「そ、そんな事ないよお！」

山下は必死に身を振らせている。

絵理沙「ほらあ、否定してるじゃ・・」

が、突然途絶える玲奈と茉奈の笑い声。

絵理沙「・・」

玲奈と茉奈は目を丸くして、絵理沙をジッと見つめている。

絵理沙「何？ どうしたの？」

山下も悶えながらあんぐりと口を開け、絵理沙に目を向けている。

玲奈「絵理沙・・」

茉奈「なんか口が・・」

山下「・・でっかくなってね？」

慌てて口元を触る絵理沙。

口の端が手で隠しきれない程広がっている事に気付く。

絵理沙、思わずオオオ口と口を開く。

絵理沙「こ、これ、A Iよ！ 怖いでしょ？」

とうとう現実の世界まで及んで来たの

玲奈・茉奈・山下「そ、そうなの？」

絵理沙「ま、まったく・・、どうなっちゃうのかしらね、私たちの未来は」

○高層ビル・エレベーター内

マスクで顔を隠し、周りの目を気にしながら上階へと向かう絵理沙。

○エルマンクリニック・診察室

白衣姿のドクトル・ジョセフの前で、

絵理沙がうな垂れ、座っている。

ジョセフ「あのね、改造人間だなんて・・、整形に対しそんな偏見を持つちやいかんよ、

絵理沙

絵理沙「でも、体をいじって変えてしまう訳でしょ」

ジョセフ「なに、それが本当の自分だと思えばいいのさ。それにね、今の世の中見た目を変えてない人間が一体どれだけおもう？」

絵理沙「・・」

ジョセフ「殆どおらん」

絵理沙「えっ？・・・」

ジョセフ「女は皆髪を整え顔を描いとるし、

男だって毎日髪を剃っとるでないか」

絵理沙「そんなの、当たり前じゃない」

ジョセフ「だが、それが本来の人間の姿ではあるまい？　もし、誰もがありのままの姿でいたとしたら、世の中もうオノ・ヨーコとジョン・レノンで溢れ返つとる」

絵理沙「・・・」

ジョセフ「誰もが皆見た目を変えておるんだ。要はただ、それが大きいか小さいかの違いだけじゃ」

絵理沙「・・・」

ジョセフ、ニツコリと笑い掛け、

ジョセフ「・・・そうは思わんか？」

絵理沙「・・・分かった。何だかおじいちゃんの話聞いたら、気が楽になった」

ジョセフ「だからね、絵理沙もその気になったら、いつでも安心してわしに身を委ねなさい。元と寸分変わらぬ絵理沙に戻してあげるから」

絵理沙「・・・ダンケ」

サムズアップで答えるジョセフ。

ジョセフ「ドクトル・エルマーン」

絵理沙、ホッと息を吐き、立ち上がる。

絵理沙「また来る」

ジョセフ「ああ、いつでもおいで」

診察室のドアに手を賭ける絵理沙。

と、突然思い出したようにジョセフが口を開く。

ジョセフ「あっ、そうだ！　大事な事を言い忘れとった」

絵理沙「えっ？・・・何？」

ジョセフ「フロゲリアンのDNAが目覚めたという事は、この話もせねば・・・」

絵理沙「・・・なんなの？」

ジョセフ「ま、ちよっと座りなさい」

絵理沙「・・・うん」

戻り、診察椅子に座り直す絵理沙。

ジョセフ、改まった口調で話し出す。

ジョセフ「絵理沙は、進化論の話聞いた事があるか？」

絵理沙「えっ？」

ジョセフ「学校で習った事は？」

絵理沙「・・・あるけど」

ジョセフ「何て教わった？」

絵理沙「なんか、偶然環境に適応出来た生物

だけが生き残った・・・みたいな」

ジョセフ「ふむ、大体そんなもんだが・・・、

が！それは間違っとなる」

絵理沙「・・・間違っとなる？」

ジョセフ「例えばだ。この世界には花や木の

葉に似た昆虫が数多く生息しとるが、果た

してそれら全てが、たまたま鳥に見つかり

にくく生まれ付いたお陰で、生き残れたと

言えるか？」

絵理沙「・・・」

ジョセフ「だとしたら、余りにも大自然の偶

然が重なり過ぎているとは思わんか？」

絵理沙「・・・」

ジョセフ「実はな、生物は偶然環境に適応し

たのではない。自らの意志で体を変化させ

て来たのじゃ」

絵理沙「自分の意志で？」

ジョセフ「そう。それが進化の正体じゃ」

絵理沙「・・・」

ジョセフ「しかも、これはどんな生き物にも

当てはまる。もちろん人類も例外ではない。

今も刻々と進化し続けておる」

絵理沙「そんなに急激に？人間が？」

ジョセフ「ああ。わしは長年整形外科医をし

て気が付いたのだが、この十年で日本人は

著しく変わった。男子は年々大谷翔平の様

に顔が小さくなり、女子はどんどん二次元

化しておる」

絵理沙「二次元化？」

ジョセフ「そう。絵理沙は思わんか？最近

アニメキャラのような体形をした巨乳女子

がどんどん増えて来るとは？特にAV

界限などで如実にな」

絵理沙「ヤダおじいちゃん、いい歳してまだそんなエッチなビデオ見てるの？」

ジョセフ「医療技術の発展の為じゃ」

絵理沙「ヤダァー、変態ジジイ・・・。でも、

確かにそうかも」

ジョセフ「多分それが現代の男女双方が望む理想形だからなのであろう」

絵理沙「・・・」

ジョセフ「これを進化と言わずして何と言う。

大谷翔平顔や淫乱巨乳女子の増加は、昆虫が花や木の葉に擬態するのと一緒にじゃ」

絵理沙「・・・知らなかった」

大きく頷き、話を続けるジョセフ。

ジョセフ「そこでだ、ここからが肝心な話なのだが、この自らの意思で進化するという事実は、我々フロゲリアンも例外ではない、と言う事じゃ」

絵理沙「・・・」

ジョセフ「それどころかフロゲリアンは、その変化の度合いとスピードが、他の生物に比べ、ずば抜けておるのじゃよ」

絵理沙「・・・えっ？」

ジョセフ「しかも我々の場合、世代的な同一性がなく、個々による一代限りの進化を成し遂げるという特殊な性質まで備わっておる。これは多分フロゲリアンが、成長するにつれ劇的に体を変化させる両生類を起源としておるからだとはしは考えとるのじゃが」

絵理沙「ど・・・どういう事？」

ジョセフ「まあ平たく言えば、フロゲリアンには己を自由自在に進化させる能力が備わっておると言う事じゃよ」

絵理沙「・・・」

ジョセフ「例えばカール」

絵理沙「お父さん？」

ジョセフ「あいつは小さい頃は体が細くて、ひ弱な子供じゃった。だが今は違う。巨大な岩は持ち上げるわ、弾丸は跳ね返すわ、その上空まで飛べるようになった。まるでブルワーカールの広告その物じゃ」

絵理沙「？」

ジョセフ「おっと、こんな話をしても絵理沙には分らんか」

絵理沙「お父さん・・・、進化したの？」

ジョセフ「ああ、途轍もなく進化した。今思えばあいつ、地球に来た頃、ヒーロー特撮番組ばかり見てたからのう。多分それですっかりかぶれちゃったんじゃない」

絵理沙「そうだったんだ。私、フロゲリアンって、みんな空を飛べるのかと思ってた」

ジョセフ「飛べるかっ！」

絵理沙「おじいちゃんは無理？」

ジョセフ「無理無理！カールだけ」

絵理沙「じゃ、奇跡と言われるおじいちゃんの整形医術も、ひょっとして進化のお陰？」

ジョセフ「ああ、その通り。その気になれば怪獣だって美女に変えるさ」

絵理沙「スゴイ！あのCM、ホントだったのね」

ジョセフ「それだけじゃないぞ。わしは他にも進化した能力がある」

絵理沙「何それ？」

ジョセフ「金儲け」

思わず吹き出す絵理沙。

絵理沙「そういう進化もあるんだ」

ジョセフ「だけど、そのお陰でカールは働きもせず、心置きなく人助けが出来ておるではないか。何しろバックに強力なスポンサーが付いておるんじゃないのう。その点ではテレビのヒーロー番組と一緒にじゃ」

絵理沙「ヤダ、脛齧りヒーローだったの？」

ジョセフ「仕方ないさ。正義の味方なんぞ、所詮、儲からんからのう」

絵理沙「カッコわるう、お父さん」

ジョセフ「だが、そんな事を言ったら恭子だってそうじゃ。あいつが湯水のように金を使い元の体を取り戻すという、まるで整形外科とは真逆な発想の再生医療とかに打ち込んでおれるのも、全て進化系親父のわしが貢いでおるからじゃ」

絵理沙「うわー！　ダンケー！　ドクトル・エルマーン！」

ジョセフ「まあそんな訳じゃ。カエル人間だって、決して、悪くはないじゃろ？」

絵理沙「そうかも」

ジョセフ「そうだ！　試しに絵理沙も夜空の星かなんか見上げ、願い事でもしてみるといい」

絵理沙「・・・」

ジョセフ「ひよっとして、何かいい事が起こるかも知れん」

そう言い、ニッコリ笑い、ウイंकをするジョセフ。

○カール家・外観（深夜）

カール家の上空に広がる満天の星空。一筋の流れ星が通り過ぎて行く。

○同・外観（早朝）

晴れ渡る青空。

朝日が眩しく輝いている。

小鳥も嬉しそうに囀っている。

と、突然絹を引き裂くような絵理沙の悲鳴が辺りに響き渡る。

絵理沙（声）「キャアアアア！」

○同・キッチン（早朝）

思わず驚き、包丁を握ったまま二階を見上げる香織。

次の瞬間、ドタドタと階段を降りる音が響き、香織の目の前を絵理沙が駆け抜けて行く。

○同・夫婦の寝室（早朝）

カールはまだベッドでだらしないいききを掻いている、カエルの姿のままで、いきなりボタンとドアが開き、絵理沙が叫ぶ。

絵理沙「お父さん！　お父さん！　逆光で彼女の顔は見えない。」

絵理沙「お父さん！起きて！」

カール「ようやく目を覚まし、寝ぼけ眼で返事をする。」

カール「何だい？絵理沙、僕を起こしに来るなんて幼稚園の時以来じゃないか。あの時は確か、大事な発表会に寝坊して・・」

言い掛けカール、思わずハッと身を起こし、絵理沙に問い質す。

カール「何かあったのか！絵理沙」

黙って壁のスイッチを入れる絵理沙。
パッと部屋の明かりが灯り、絵理沙の姿が浮かび上がる。

カール「絵理沙！」

ニッコリと微笑む絵理沙の顔は、すっかり元に戻っている。

カール「その顔！」

絵理沙「私・・、戻った」

カール「・・・」

絵理沙「元に」

カール「・・・」

絵理沙「手だってほらっ！」

そう言い、ベッドに歩み寄り手の平を開いて見せる絵理沙。

水掻きがなくなっている。

カール「・・・ホントだ」

絵理沙「おじいちゃんの言った通りだった。

一生懸命願ったら・・・、戻れた！」

いきなりカールに抱き着く絵理沙。

カール「おいおい」

絵理沙「私、進化したの！」

カール「・・・」

絵理沙「カエルから人間に！」

カール「・・・」

絵理沙「全部お父さんのDNAのお陰！」

カール「・・・僕の？」

絵理沙「そう！おじいちゃんが言ってた！

フロゲリアンの特別な能力だって」

カール「・・・」

絵理沙「よかったー！カエルにならなくて。
ありがとう！お父さん」

カール「そ、そうか。よかったね、絵理沙」

ふと寝室の鏡に目を向けるカール。

カエルの姿の自分に抱き着く人間の娘、

絵理沙が映っている。

カール、複雑な表情で微笑み、そして

優しく絵理沙に声を掛ける。

カール「ホント・・・、よかったね」

○絵理沙の学校・絵理沙のクラス（朝）

授業前のざわざわとしたクラス。

教壇に教師Aが立っている。

隣には緊張した面持ちの山下の姿。

教師A「はい、皆さん、授業前にちよっ

と聞いてください。今朝はみんなにビッ

グなニュースがあります。先週行われた柔

道の新人戦で、山下君がなんと、優勝をい

たしました」

クラスにどよめきが起こる。

生徒らは皆、愕然とした顔で山下を見

つめている。

教師A「皆さん、山下君に拍手を送ってあげ

てください」

パラパラと起こり始める拍手。

と、一人、盛大な拍手をする者がいる。

絵理沙である。

手を叩きながら嬉しそうに呟く絵理沙。

絵理沙「山下君、君も進化してんじゃん」

手を叩く音はだんだんと大きくなり、

次第に盛大な拍手へと変わって行く。

山下は照れ臭そうに頭を掻いている。

そんな中、頑なに手を叩こうとしない

生徒がいる。

玲奈と茉奈である。

二人ともふて腐れた顔でソッポを向い

ている。

×

×

×

休み時間。

山下が目を輝かせ絵理沙に話している。

山下「いやあ、一回くらい勝てればいいかな

と思っただけさ、優勝しちゃったんだよ」

絵理沙「へーえ」

ふらりと玲奈と茉奈がやって来る。

無言で山下を見つめている。

山下、鼻息を荒げ彼女らに言い放つ。

山下「どうだ二人とも！俺が男らしいって

よく分かったろ？」

キッと山下を睨む玲奈と茉奈。

山下「な・・、なんだよ」

突然、満面笑みに豹変する玲奈と茉奈、いきなり背後から山下に襲い掛かる。

玲奈「やったなー！！」

茉奈「おめでとー！！」

山下「な、なにすんだよう」

玲奈「すげーなー、山ブター」

茉奈「カッケー、デブまんー」

途端に山下、ナヨナヨと悶え出す。

山下「ああーん、山下だよー」

呆れ顔で呟く絵理沙。

絵理沙「こりゃ駄目だ」

○とある公園

木々が生い茂る都市郊外の公園。

親子連れやカップルなど、沢山の人がのんびりと過ごしている。

ジョギングやウォーキングを楽しむ人もいる。

そんな中、カールと絵理沙が仲睦まじく散歩している。

カール「すまなかったね絵理沙、父さんのせいで色々苦労を掛けて」

絵理沙、微笑みながら首を振り、

絵理沙「ううん、私、自分が半分宇宙人だと分かって、かえってワクワクして来た」

カール「そうなのかい？」

絵理沙「うん。人と違うって、なんか楽しい」

カール「そうか・・。ホッとしたよ」

絵理沙「・・・」

カール「正直言うとな、僕は今まで絵理沙にどう接していいか、分からなかったんだ」

絵理沙「・・・」

カール「岩を持ち上げたり、銃で撃たれたり
は全然平気なんだけど、やっぱり絵理沙が
一番強敵かな」

絵理沙「ねえ、お父さん」

カール「ん？」

絵理沙「お父さんは何で、正義のヒーローに
なってると思うたの？」

カール「・・・どうして？」

絵理沙「うん」

カール「・・・」

カール、少し考え、ポツリと言う。

カール「褒められたかった、からかな？」

絵理沙「えっ？」

カール「だって、誰かに褒められると嬉しい
だろ？」

絵理沙「・・・」

絵理沙はポカンとしてカールを見つめ
ている。

絵理沙「それだけ？」

カール、ニツコリと笑い、

カール「それだけで、充分だと思うけど」

絵理沙「・・・」

カール「父さんはね、地球に来てからずっと
独りぼっちだった。誰にも正体を知られな
いようこっそりと生きて来た。だからね、
どんな形であれ誰かに認められ、褒めて貰
えるってのは、とっても嬉しい事なんだよ」

絵理沙「・・・」

カールは少し寂しそうに微笑んでいる。
ふと絵理沙、思い出したように訊ねる。
絵理沙「そう言えば、何でタイニーリップス
なの？」

カール「ああ・・・、そりゃ故郷の星にいた頃
の僕のあだ名だよ」

絵理沙「あだ名？」

カール「おちよぼ口って意味さ」

絵理沙「おちよぼ口？」

カール「カエルの癖に口が小さいってのはね、
一人前じゃないって事だよ」

絵理沙「一人前じゃない？」

カール「僕は何をやっても駄目な子供だった。

当時は周りに散々言われたよ。おちよぼ

口、おちよぼ口って」

絵理沙「・・・」

カール「悔しかったなあ・・・。でも、今となってはいいい思い出かな」

カールは遠い目で空を見つめている。

○ハンバーガー店

客で賑わう店内で、カールと絵理沙が向き合い座り、ハンバーガーにかぶり付いている。

絵理沙、ポケットからスマホを取り出し、カールに向ける。

絵理沙「にしてもお父さん、何でこんなくたびれた格好してるの？」

スマホには例の園児と写ったヨレヨレボロボロのタイニールップスの画像。

カール「いやあ、そりや僕だって映画のヒーローみたいないつもキチっとしていたいよ。

だけど現実には中々そうはいかないんだよ。瓦礫をどけたり爆風を受けたりで、ユニフォームなんてアツという間にボロボロにな

っちゃうんだから」

絵理沙「そう言えば、この間は銃で撃たれて穴だらけだったっけ」

カール「そうだろ？ みんな僕を見るとすぐ撃ちたがるんで困るよ」

絵理沙「平気なの？ 中身は」

カール「そりや、ちよっとは痛いさ」

絵理沙「ちよっと？」

カール「うん、抓られたくらい」

絵理沙はニヤニヤとカールを見つめている。

絵理沙「いつから飛べるようになったの？」カール「いつから？・・・そうだね、インドで修業してた頃かな」

絵理沙「えっ？・・・お父さん、インドに行ってた事があるの？」

カール「インドだけじゃないよ。色んな所で訓練を積んだよ」

絵理沙「そうだったんだ」

ポツリと口を開くカール。

カール「カイザーにいた事もあるし・・・」
絵理沙「・・・カ！」

絵理沙、目を丸くして聞き返す。

絵理沙「カイザーって、今世間を騒がせてるテロ組織の？」

カール「ああ、僕がいた頃はただの傭兵訓練機関に過ぎなかったんだけどね。それが、いつの間にかあんなになっちゃって」

絵理沙「・・・」

カール「実は母さんとはね、そこで知り合っただんだ」

絵理沙「ええっ！」

カール「僕の教官だったんだ、母さんは」

絵理沙「・・・」

絵理沙、愕然とカールを見つめている。

カール「ん？・・・どうしかした？」

絵理沙「それって・・・、お父さんが宇宙人だったって事より、凄いショックかも」

カール「・・・」

絵理沙「お父さんって・・・、一旦話し出したら、何でも喋っちゃうんだね」

カール「カールの顔色が見る見る変わって行く。

カール「・・・まずかったかな？」

絵理沙「・・・」

カール「言わない方がよかったかな？」

○賑やかな大通り

人々が行き交う繁華街。

カールと絵理沙がそぞろ歩いている。

カール「なあ、絵理沙、母さんがカイザーの教官だったって話、母さんには内緒にしないとくれない？」

絵理沙「ええ？　どうしよっかな」

カール「頼むより、つい口が滑っちゃって」

と、どこからか響いて来る拡声器の声。
前方に人だかりが出来ている。

何事かと隙間から覗き込む絵理沙。

が、

中を見た瞬間、ハッと息を呑む。

人垣の中央に、プラカードを掲げ演説するタイニーリップスがいる。

慌ててカールに伝える絵理沙。

絵理沙「お父さん大変！ タイニーリップスがいますよ！」

カール「なんだって！」

カールも慌てて中を覗き込む。

絵理沙「でも・・・」

偽タイニーリップスのコスチュームは

ピカピカに輝いている。

絵理沙「あっちの方がカッコいい」

カール「・・・」

拡声器で人々に訴え掛ける偽タイニーリップス。

偽タイニーリップス「私は皆さんに言いたい。

今すぐこのテロリストらを極刑にすべきで

す。こいつらは危険なモンスターだ。気を

許せば平和な社会はすぐにこのモンスター

どもの餌食になってしまおうでしょう」

手に持つプラカードには国連ビルを襲

った犯人らの写真が張り付けてある。

偽タイニーリップス「裁判なんて時間の無駄

だ。こいつらは所詮、生まれつきの悪党

です。このタイニーリップスがそう言うの

だから間違いありません！」

息を呑み偽者を見つめる絵理沙、思わ

ずカールに声を掛ける。

絵理沙「お父さんいいの？ あんな事言わせ
ておい・・・」

だがカールの姿はどこにもない。

辺りを見回す絵理沙。

すると突如、頭上からカールの声が響

いて来る。

カールの声「皆さん、その男は違います！」

どよめき、空を見上げる人々。

綻びかけたマスクを付けたカールが、

下は普段着のままマントも付けず空に

浮かんでいる。

カール「タイニリップスではありません」
あちこちから「誰だあれは！」「中途
半端なタイニリップスがいるぞ！」
「偽者よ！」などと声が飛んで来る。
カール「いや・・、その」

思わず言葉に詰まるカール。
咄嗟に絵理沙が叫ぶ。

絵理沙「でもあの人、空に浮いてるよ！」

一瞬静まる人々。
が、すぐに「そう言やそうだ」「じゃ、
こっちが本物？」「マント必要ないん
かい」と呟く声が広がって行く。
カール、申し訳なさそうにポツリと口
を開く。

カール「すみません、マントは只の飾りなん
です」

人々は啞然として空を見上げている。
プラカードを指差し、カールは声を上
げる。

カール「皆さん！ 聞いてください。確かに
テロは重罪です。容疑者は厳格に罰せられ
なければいけません。でも、その醜い野獣
達は決してモンスターなどではありません。
罪を償えばただの人です。彼らにはちゃん
と裁判を受ける権利があります。彼らは国
際テロ組織、カイザーに操られているだけ
なんです。どうか、見掛けだけで人を判断
しないでください。お願いします」

偽タイニリップス、思わずプラカー
ドを叩き付け、地団駄を踏み出す。
カールは偽者に言い放つ。

カール「それからその君、どこの誰かは知
らないが、真似をするならちゃんとやって
くれ。本物は、もっとビシッとしてるぞ！」

そう言い残すや否や、カールは空に消
えて行く。

その後ろ姿を見つめ絵理沙、しみじみ
と呟く。

絵理沙「中身だけ、はね」

○カーラ家・リビング

テレビからMCの声が聞こえて来る。
絵理沙、ソファーに前のめりに座り、
ジッと画面を凝視している。

○同・テレビ画面

ワイドショーのMCが偽タイニーリップスの話題を取り上げている。
MC、フリップに描かれたイラストを指差し、

MC「そしたらなんと、そこに本物を名乗る
もう一人のタイニーリップスが現れた訳な
のですが、国際政治学者の升本さん、一体
どう思われますか？」

フリップにはプラカードを持つ偽タイ
ニーリップスと、空から抗議するマス
クだけのタイニーリップスのイラスト
が滑稽に描かれている。

隣の席にいるコメンテーターの升本が
したり顔で発言をする。

升本「そうですね、仮に空を飛んでいる方が
本物だとして、まあ多分宙に浮いているん
だから本物なのでしょうけど、彼は本気で
言ってるんですかね。あんなテロ組織のケ
ダモノ連中など、改心する訳ないですよ。
世間の人たちもそんな事充分に分かってる筈
です。まあ、その点では明らかに偽者の方
が核心をついていると言えるでしょうね」

○同・リビング

突然画面に向かって怒り出す絵理沙。
絵理沙「勝手な事ばかり言わないでよ！」

○同・テレビ画面

升本「それよりですね。危惧されるのは、
今後は恐らく、ああいった類いの模倣犯が
次々と現れると思われますので、本物のタ
イニーリップスは一刻も早く、その正体を
明かすべきだと、私は思いますね」

○同・リビング

堪らずテレビを消す絵理沙。

絵理沙「何言ってるのよ！ 正体を明かすだなんて、そんな事出来る訳ないじゃない」

キッチンから香織の声。

香織（声）「えっ？ 何か言った？」

絵理沙「なんでもなーい（小声で）教官」

香織（声）「え？ なーに？」

絵理沙「なんにもー」

絵理沙、ふと窓辺から外を眺め、キッチンの香織に訊ねる。

絵理沙「ねえ・・・、お父さん、まだ出張から返らないの？」

香織（声）「なによもう、絵理沙ったら、急にお父さんお父さんって、懐いちゃって」

絵理沙「いいじゃん、別に」

空を眺め、絵理沙は呟く。

絵理沙「平和ねえ」

窓の外はポツカリと雲が浮かんでいる

○カール家・外観

住宅街を走る一台のワゴン車。

カール家の前で静かに停車する。

○同・リビング

ふいに響くドアホンの音。

キッチンから香織の声。

香織（声）「絵理沙、ちよつと出てくれる？」

絵理沙はぼんやりと外を眺めている。

香織（声）「絵理沙、聞いているの？ 絵理沙」

絵理沙、不承不承返事をする。

絵理沙「分かった・・・、今出る」

○同・キッチン

香織が食事の支度をしていると、困惑した顔付きで絵理沙がやって来る。

絵理沙「お母さん」

香織「ん？ 誰だったの？」

絵理沙「ドアホンのテレビに、テレビに出てる人が出てる」

香織「は？ 何言ってるの？」

○同・ドアホンモニター

朝のニュースキャスター、森村アナがモニターに映っている。

○都会の街並み

広い道路をワゴン車が走り抜けて行く。

○ワゴン車・車内

真ん中のベンチシートに香織と絵理沙がポツンと腰掛けている。

隣に座る森村アナが話し掛ける。

森村「どうぞよろしくお願いいたします。私、ニュースキャスターの森村と申します」

香織「ええ・・・、よく存じております」

後部座席にはむさ苦しいジャンパー姿の中年男が二人、無言で座っている。

森村「後ろにいるのはディレクターの岡田とカメラマンの中村です」

香織、愛想笑いを浮かべコクリと後ろの二人に挨拶し、森村に訊ねる。

香織「あの・・・どういう事なのでしょう？」

私たち、主人が事件に巻き込まれていると伺ったので、こうして付いて来たのですが」

森村「あ・・・、その件に関しては大佐から」

香織「大佐？」

助手席に座る白人、バロウズ（５５）が振り向き、挨拶をする。

バロウズ「初めまして、私、合衆国国防総省のバロウズと申します」

香織「国防総省？」

絵理沙「アメリカの？・・・」

香織「一体・・・何が起きているんですか？」

そもそも何で、国防総省と報道の方が一緒におられるんです？」

森村「今回私どもは、報道各社を代表し取材

させていただいているんです」

香織「取材？」

頷きながらバロウズが語る。

バロウズ「ええ。実は今、大変な事が起きておりまして、ご主人のタイニールップス氏にご協力を仰いでいるのです」

香織「協力・・・？」

香織「怪訝そうに訊ねる。」

香織「あの・・・、ちょっと待ってください。タイニールップスが私たちの家族だという事を、誰から？」

バロウズ「・・・ご本人から伺いました」

香織「本人？！ 主人が話したんですか！」

森村「ご心配なさらないでください。この件に関しては一切、報道はいたしませんから」

香織「ひょっとして、主人の身に何か起こったんですか？」

バロウズ「いえ、これは彼と言うより、人類全体に起こりうる脅威と言った方が適切かと思います」

思わず絵理沙、声を上げる。

絵理沙「人類全体？！」

香織も目を丸くし、バロウズに訊ねる。

香織「一体、何が起きてるんですか？」

表情を曇らせ、バロウズは口を開く。

バロウズ「小惑星です・・・。巨大な隕石が地球に迫っているのです」

絵理沙「小惑星？」

バロウズ「そう、かつてない程巨大な」

香織「で、でもそんな話、どこからも聞いた事ありませんけど」

森村「報道管制が敷かれています。もしこの事実が人々に知れ渡ったら、世界中が大パニックになってしまいますから」

香織・絵理沙「・・・」

森村「ですから今回我々は、全てが無事解決し、人類が救われた後に、改めて事実を伝えようと、こうやって取材を進めている訳なのです」

香織「あのう、ちょっと伺っていいですか？」

バロウズ「はい」

香織「もし、その小惑星が地球に衝突したら、私たちは、一体どうなって・・・」

バロウズ「その時は折角の取材も、全部水の泡になってしまふでしような」

香織・絵理沙「・・・」

バロウズ「だって、ニュースを見る人も送る人も、全てこの世からいなくなってしまうでしょうからね」

愕然とする絵理沙と香織。

○森の道（夕）

延々と続く森の中の道路を、ワゴン車が奥へと向かって行く。

○とある施設の敷地（夕）

森を拭けると目の前に広大な敷地が広がりが、とある施設の門が見えて来る。その門を挟み、延々と続く鉄柵が彼方まで広がっている。フリーパスで守衛を抜け、ワゴン車は敷地内へと入って行く。

○ワゴン車・車内（夕）

辺りを見回しながら香織が口を開く。

香織「あの、ここって」

バロウズ「・・・懐かしいですか？」

香織「えっ？・・・いえ、別に」

バロウズ「そうです。かつてカイザーの傭兵訓練所があった場所ですよ」

絵理沙がニヤニヤしながら香織を見つめている。

香織「何？　どうしたのよ、絵理沙」

絵理沙「隠さなくたって大丈夫よ。私知ってるんだから、お母さんがカイザーにいた事」

香織「えっ？」

絵理沙「お父さんから聞いたかった」

香織「・・・お父さんたらもう」

香織、忌々し気に呟き、ふと窓の外に目を向ける。

敷地には工場が幾つも並んでいる。

香織「でも、今は信じられない程敷地が広がって、それに大きな建物ばかり」

バロウズ「ここは現在、貝沢重工という企業が所有しています」

香織「貝沢重工？」

絵理沙「・・・カイザー？」

バロウズ「ええ、お察しの通り、国際的テロ組織のもう一つの顔です」

絵理沙「えっ？」

香織「そんな事が、許されるんですか？」

バロウズ「これは非情に難しい政治的問題が絡んでいるので、今ここでそれを説明するのはちよつと・・・」

香織「一体、何を作っている会社ですか？」
バロウズ「全世界に向け、兵器を製造しています」

香織「ええっ？ あちこちで紛争の火種を振り撒いているテロ組織が、諍いの道具まで作ってるんですか？」

バロウズ「ですから、今ここでその件に関して議論するのは敢えてやめておきましょう」

言葉を失う香織と絵理沙。

ふいにバロウズ、カバンからタブレットを取り出す。

バロウズ「さて、作戦本部に到着するまで、今回のミッションをここでざっと説明しておきましょう」

○同・タブレット画面（タ）

画面に地球とそれに向かって突き進む小惑星のアニメが映し出される。

バロウズ（声）「これが地球、そしてこっちが迫り来る小惑星です。我々はまず核弾頭ミサイルを数多く発射し、隕石を破壊する計画を立てました」

地球から発射されるミサイルの数々。
バロウズ（声）「ご存知かどうか知りませんが、実は隕石にミサイルを命中させるのは一キロ先の針の穴に糸を通すより難しい事だと言われています」

ミサイルは殆ど小惑星を外れ、数発だけが小惑星に命中、爆発する。

バロウズ（声）「しかも計算の結果、核攻撃では隕石を破壊するどころか、その勢いすら止められない事が判明しました。核兵器は表面の物を一掃する能力は高いのですが、宇宙規模では案外無力なのです」

ビクともしない小惑星。

バロウズ（声）「したがって我々が取り得る道はただ一つ。小惑星の側面から核弾頭を当て地球へと向かう軌道を変える、つまり、誰かがミサイルを操縦し、巨大隕石の脇腹に突っ込むしか手段が残されていない事が分かりました」

小惑星から逸れた方向に発射されるミサイル。

ミサイルは途中で向きを変え、小惑星の側面に命中する。

小惑星が地球から離れて行き、シュミレーションアニメは終了する。

○同・車内（タ）

香織「でも、それって・・・」

バロウズ「そうです。有人核ミサイルなど、まるで太平洋戦争末期におたくの国が行った常軌を逸した行為その物ではないですか。そんな非人道的兵器など現代社会に於いて、世界中どこを探したところで所有する国家及び組織があるとは、とても思えません」

香織「・・・ところが、あつたんですね」

バロウズ「ええ」

香織「カイザーが持っていた」

バロウズ「おっしゃる通りです」

香織「如何にも考えそうな事だわ、カイザーなら」

バロウズ「でもお陰で人類は救われる」

香織「・・・」

バロウズ「我々は、すぐさまカイザーに打診しました。すると彼らは喜んで武器を提供するとの返事をくれました。考えてみればそれも当然でしょう。人類が滅亡したら、テロもへったくれもありませんからね」

香織「それじゃ、ひよっとしてその有人核弾頭ミサイルはここで？ この日本で製造されてる、という事なのですか？」

バロウズ「そう、なりませんかな」

香織「・・とんだお家芸ね」

バロウズ「さっきも申しましたが、その件について今ここで追及するのは、敢えてやめておきましょう」

香織「ええ、そんな場合じゃありませんね」

バロウズ「無論、操縦士もろとも小惑星に突っ込むなどという乱暴なミッションは、今の時代、決して許される事ではありません。ちゃんと脱出用ポッドは装備いたしました」

香織「操縦士は、自爆せずに済むという訳ですか」

バロウズ「ええ、そうです。ただ一つ問題があります。脱出は宇宙空間で行わざるを得ないので、帰還する為には、ポッドは高速で大気圏に突入しなければなりません」

香織「突入？ じゃ相当な高熱にさらされるのでは？」

バロウズ「その通りです。小さなポッドでは操縦士は断熱圧縮による影響をもろに受ける事になります」

香織「・・」

バロウズ「とても、生身の人間に耐えられるものではありません」

香織「・・」

バロウズ「そういう訳で、我々は今回のミッションを遂行出来る人物は、この世にただ一人しかいない、という結論に達しました」

バロウズ、香織と絵理沙をジッと見つめ、静かに口を開く。

バロウズ「もう、それが誰かは・・お分かりですね」

○貝沢重工・本社ビル（タ）

玄関前に止まるワゴン車。

バロウズ、香織、絵理沙が車から降り、建物の中へと入って行く。

森村とスタッフも後から降りて来る。

○同・通路（タ）

遥か奥まで真っすぐに伸びた広い通路。人の姿はない。

バロウズに案内され、香織と絵理沙が歩いて行く。

その後を森村、ディレクターの岡田、カメラマンの中村が付いて行く。

足音だけが辺りに響いている。

ふと、香織がバロウズに訊ねる。

香織「ところで大佐、主人とどうやってコンタクトを？」

バロウズ「はい？」

香織「正体は誰にも知られていなかった筈ですが」

バロウズ「ああ・・・、これですよ」

ポケットから名刺を取り出すバロウズ。バロウズ「ここにある携帯番号で」

名刺には「タイニールップス」の名と、電話番号が記されてある。

バロウズ「どうぞやらご主人は、方々にこれを配られていたようですよ」

香織「えっ？ 正義の味方の営業してたんですか？ うちの人」

バロウズ「実にマメで奇特なヒーローですな」
呆れ顔で呟く香織。

香織「・・・ったく、あの人らしいわ」

○同・管制室（タ）

中央に大型モニターが備え付けられた広いホール。

そのモニターを囲み、大勢の男女が従事している。

と、その様子を興味深そうに覗き込む一人の老人がいる。

入り口が開き、香織と絵理沙を連れ、バロウズが入って来る。

絵理沙、老人を見るなり声を上げる。

絵理沙「ダンケ！」

サムズアップでニッコリと笑う老人、
ジョセフ。

絵理沙「来てたんだ！」

ジョセフ「もう、居ても立ってもおられなくてな、真っ先に跳んで来たよ」

香織「どんな様子ですか？」

ジョセフ「いやあ、さっぱり分からん」

リーダーを監視している管制官Aの声が響く。

管制官A「只今よりミサイルが大気圏を通過します」

バロウズ「そうか」

管制官A「モニターに画像を切り替えます」

バロウズ「了解」

絵理沙、呆気にとられた顔でジョセフに訊ねる

絵理沙「えっ！ もう飛んでっちゃったの？

お父さん」

ジョセフ「ああ・・・、つい今さっきな」

○同・大型モニター

モニターに映し出されるリーダー画像。大気圏を表示する画面の中を光の点が通過している。

○同・管制室（タ）

モニターを見つめるバロウズ。

急ぎモニターに駆け寄る絵理沙。

ジョセフ、香織、森村やスタッフらもモニター前に集まり、リーダー画像に目を向ける。

○同・大型モニター

大気圏をゆっくりと移動する光の点。

○同・管制室（タ）

不安げにモニターを見ている絵理沙にジョセフが耳打ちをする。

ジョセフ「聞いたところによると、事故は大気圏を通過する時が、一番多いらしい」

絵理沙「ええっ？」

思わず香織が口を出す。

香織「もう、やめてくださいよ、お義父さん」
ジェセフ「いやあ、すまんすまん」

ジョセフが軽く笑い飛ばす。

香織は困惑顔でジョセフを睨んでいる。
と、香織の背後で女の声。

女の声「久しぶりね」

ハッとして振り返る香織。

長身の白人女、メルーサ（39）が、
薄笑いを浮かべ見つめている。

メルーサ「あなたがいなくなって、ここも寂
しくなったわ」

香織「メルーサ！」

メルーサの胸元には「CEO」のバッ
ジが輝いている。

香織「CEO？」

メルーサ「ええ、貝沢重工株式会社取締役」

香織「随分偉くなったもんね」

メルーサ「どうぞお見知り置きを」

ふいにメルーサに詰め寄る香織。

香織「何で国連ビルを襲ったの？」

メルーサ「何？ いきなり。何の話？」

香織「しらばっくれしないで、あなたの差し金
でしょ？あの襲撃事件。如何にもあなたが
考えそうな事だわ」

メルーサ「・・・」

香織「何で？ 国連なんてもう国際社会じゃ
殆ど機能してないじゃないの。意味ないで
しょ？ 襲ったところで」

メルーサ「・・・だからよ。あれは単なるデモ
ンストレーション、新商品の」

香織「新商品？」

メルーサ「そっ、野獣のDNAを持つ特殊強
化傭兵」

香織「道理で・・・物騒な顔ぶればかりだと
思ったわ。マジでヤバイ連中なのね」

メルーサ「ええ、わざと捕まってやったのよ
あなたの旦那に。だから、その気になれば
脱獄くらい簡単にやってのけるわ」

香織「なんですって！」

森村らに向かいお辞儀をするメルーサ。

メルーサ「皆さん、その時はまたニュースに取り上げて下さいね」

森村とスタッフは啞然としてメルーサを見つめている。

バロウズにも挨拶するメルーサ。

メルーサ「それから・・・、いつもお世話になっております、大佐」

目も合わせぬバロウズ。

メルーサ、ニツコリと笑いながら再び香織に目を向け、

メルーサ「じゃこれで。私もご主人の検討を祈っておりますわ」

そう言い残しメルーサ、さっさと管制室を後にする。

後姿を忌々し気に睨み、香織が呟く。

香織「・・・嫌な女」

ポツリとジョセフが話し掛けて来る。

ジョセフ「大丈夫かい？」

香織「ええ、もちろん・・・。元同僚です」

ジョセフ「じゃ、君とカールを取り合ったというのは・・・、彼女の事かい」

絵理沙「えっ！」

思わず目を丸くし、コソコソとジョセフに訊ねる絵理沙。

絵理沙「取り合った？」

ジョセフもコソコソと答える。

ジョセフ「つまり、恋敵だとさ」

絵理沙「カエルなの？」

ジョセフ「見掛けじゃないのさ、人はね」

啞然とする絵理沙。

突然、管制官Aの声が響く。

管制官A「ミサイルが大気圏を抜けます」

すぐにモニターに向かうバロウズ。

思わず絵理沙もモニターに目を向ける。

○同・大型モニター

光の点が大気圏から外れて行く。

○同・管制室（タ）

管制官Bが報告する。

管制官B「ミサイル内異常なし。無事大気圏を抜けました」

ホッと息を付くバロウズ。

絵理沙も胸を撫で下ろす。

女性管制官Cが告げる。

管制官C「ミサイル内の映像に切り替えます」

頷き、モニターに目を向けるバロウズ。

バロウズ「いよいよマメで奇特的なヒーローと、ご対面か」

目を輝かせモニターに向かう絵理沙。

○同・大型モニター

徐々にノイズが消え鮮明になる操縦室。

と、タイニーリップスがカメラ目線で手を振っている。

が、相変わらずヨレヨレのマスク姿。

○同・管制室（タ）

絵理沙、呆れ顔で声を掛ける。

絵理沙「お父さん！ まーだそのくたびれたマスク着けてるの？」

タイニーリップス（声）「よう！ 絵理沙。

いやあ中々新しいのを作る暇なくてさ」

絵理沙「もう、宇宙へ行く時くらい、ちゃんとした格好してよ」

タイニーリップス（声）「ゴメンゴメン」

突然、香織が割り込んで来る。

香織「あなた！ 何で私がカイザーにいた事絵理沙にバラしちゃったのよ！」

○同・モニター

しどろもどろになるタイニーリップス。

タイニーリップス「えっ？ あ、ああ、その、

つい成り行きで」

香織（声）「成り行きで・・・じゃないわよ！

帰ったら反省会ですからね」

タイニーリップス「・・・」

タイニーリップスの目が泳いでいる。

○同・管制室（タ）

キッとモニターを睨み付けている香織。遠慮がちにバロウズが口を挟んで来るバロウズ「あの、お取込み中大変申し訳ないのですが、人類の危機を救う話をさせて貰っても、よろしいですか？」

香織、ハッと我に返り、

香織「えっ？ あ、ごめんなさい」

バロウズ、モニターに向かい、

バロウズ「タイニーリップスさん。国防総省のバロウズです」

○同・大型モニター

タイニーリップス、ホッとした様子で、タイニーリップス「あ、バロウズさん。どうぞよろしくお願いいたします」

○同・管制室（タ）

バロウズ「宇宙では様々な影響が考えられ、こちらの計算がたった数億分の一％狂っただけでも目標を捉える事が難しくなっています。どうか確実に小惑星にロックオン出来るまで、ミサイルの操縦をよろしくお願いします」

タイニーリップス（声）「了解しました」

管制官Cの声「タイニーリップスさん。ではそれまで自動操縦で目標付近まで飛行を続けてください」

タイニーリップス（声）「ラジャー」

○同・大型モニター

映像は操縦室からリーダー画面に切り替わり、光の点は地球を現す表示から宇宙の彼方へと向かって行く。

○貝沢重工・外観（夜）

済んだ夜空に黒々と浮かび上がる貝沢重工の巨大な工場。その上空には満天の星が輝いている。

○同・管制室（夜）

静かな室内。

管制官たちは黙々と従事している。

そんな中、一人壁際の長椅子でうたた寝をしている絵理沙。

その様子を横目で眺め、香織が呟く。

香織「全く、この世が終わってしまうかも知れないってのに、呑気なもんね」

静かにジョセフが近づき、声を殺し話し掛けて来る。

ジョセフ「しかし、よくもまあこんな大っぴらに武器製造拠点を建てたもんじゃのう」
香織「ええ、テロ行為だけかとおもったら、

いつの間にか」

ジョセフ「わしはふと、キッドって映画を思い出したよ」

香織「キッド？」

ジョセフ「悪ガキが窓ガラスを割った後にな、いいタイミングでガラスを担いでやって来るんじゃよ、チャップリンが」

香織「ああ・・・、全く同感です」

ジョセフ「ひょっとして、有人核弾頭ミサイルだって、持っとるかも知れんぞ、世界中どこの国も」

香織「名乗りを上げないだけでね」

ふいにタイニーリップスの声が響く。

タイニーリップス（声）「管制室、管制室」

○同・大型モニター

管制官C、レーダー画面からミサイル操縦室の画像へ切り替え、応答する。

管制官C（声）「はい、こちら管制室」

タイニーリップス「小惑星を発見しました」

○同・管制室（夜）

管制官C「了解」

管制官C、奥にいるバロウズに向かい、管制官C「大佐」

即座に指示を出すバロウズ。

バロウズ「タイニーリップスさん、では早速操縦を手動に切り替え、目標を捕捉してください」

タイニーリップス（声）「ラジャー」

慌ただしく動き始める管制室。

椅子から立ち上がる森村、スタツからも準備を始める。

フツと息を吐き、ジェセフが呟く。

ジョセフ「いよいよか」

絵理沙に声を掛ける香織。

香織「起きて絵理沙、始まるわよ」

絵理沙「・・・起きてる」

絵理沙はパツチリと目を開けている。

○同・大型モニター

タイニーリップスが報告する。

タイニーリップス「現在、順調に小惑星に近づいています。距離は・・・約十万キロ」

○同・管制室（夜）

管制官A「了解。三万キロまで接近してください」

タイニーリップス（声）「ラジャー」

絵理沙がモニター前に駆け寄って来る。

○同・大型モニター

目標を見据え、操縦桿を操作するタイニーリップス。

タイニーリップス「目標まで・・・七万キロ」

○同・管制室（夜）

ジツとモニターを見据えるバロウズ。

香織も心配そうに目を向けている。

○同・大型モニター

タイニーリップス「・・・五万キロ」

○同・管制室（夜）

固唾を飲むジョセフ。

息を殺しマイクを握る森村。

カメラマンはまんじりともせず、モニターにカメラを向けている。

タイニーリップス（声）「あと、四万キロ」

張り詰めた空気が流れる管制室。

絵理沙、祈るように手を合わせる。

と、同時に響く父の声。

タイニーリップス（声）「到達しました．．。

三万キロです」

声を上げ、バロウズが命令を下す。

バロウズ「ターゲットにロックオン！」

緊張した声で管制官Aが繰り返す。

管制官A「ターゲットにロックオン」

淡々と復唱するタイニーリップス。

タイニーリップス（声）「はい、ターゲットにロックオンします」

○同・大型モニター

途端に操縦席内に響き出すアラーム音。非常灯がタイニーリップスを赤く染めている。

タイニーリップス、冷静に計器類を指差し確認し、軽く頷きながら報告する。

タイニーリップス「ロックオン．．、成功しました」

○同・管制室（夜）

静かに管制室に上がる安堵のどよめき。バロウズが叫ぶ。

バロウズ「よしっ！ 脱出だ！」

上ずった声で管制官Aが繰り返す。

管制官A「タイニーリップスさん、では速やかに脱出してください！」

○同・大型モニター

淡々と答えるタイニーリップス。

タイニーリップス「了解。脱出します」

そして悠然と安全ベルトを外し、嬉しそうにカメラに向かい、手を振る。

タイニーリップス「今から帰るよー、絵理沙」

○同・管制室（夜）

思わず急かす絵理沙。

絵理沙「そんなのいいから急いで！お父さん」

管制官Cの声が響く。

管制官C「脱出ポッドに映像を切り替えます」

○同・大型モニター

格納室に切り掛かわる画面、映し出される球形の大きなポッド。

○同・管制室（夜）

不安そうにモニターを見つめる絵理沙。

バロウズも目を見張っている。

香織、ジョセフ、森村、カメラマン、ディレクター、管制官、全員息を呑み様子を見守っている。

○同・大型モニター

けたたましくアラーム音が鳴り響いているミサイル内。

映像には激しくノイズが走っている。が、ポッドは全く発射する様子がない。

○同・管制室（夜）

業を煮やしバロウズが問い質す。

バロウズ「どうしたんだ？ 画像がフリーズしたのか？」

管制官C「いえ、受信状態は正常です」

バロウズ「じゃ、なぜ」

管制官B「脱出をまだ、確認出来ていません」

バロウズ「なんだと！」

慌ててモニターに呼び掛けるバロウズ。
バロウズ「どうしました！ タイニーリップスさん！」

○同・大型モニター

返事もなく、ポッドも全く動かない。

○同・管制室（夜）

呼び続けるバロウズ。

バロウズ「タイニーリップスさん！ タイニーリップスさん！」

絵理沙と香織も呼び掛ける。

絵理沙「お父さん、どうしたの？ 早く脱出して！」

香織「何もたまたしてるの！ あなた」

ジョセフまで怒鳴り出す。

ジョセフ「何やっとなるんだ！ カール、返事をせんか！」

○同・大型モニター

全く動かないポッド。

が、ようやくぼそつと呟くタイニーリップスの声が返って来る。

タイニーリップス（声）「親父い、やられた。

まんまとハメられたよ・・・、カイザーに」

ジョセフ（声）「なにに？」

タイニーリップス（声）「見てくれ」

ふいにポッドを掴み取る巨大な手。

タイニーリップス（声）「大きく見える様に、

カメラのすぐ手前に置いてあったんだ」

ビーチボール大のポッドを抱え上げ、

タイニーリップスが呆然と立ち尽くしている。

タイニーリップス「猫用かよ、これ」

○同・管制室（夜）

思わず眼を剥くジョセフ。

ジョセフ「うわっ！ ちっさ！」

愕然とする絵理沙。

絵理沙「・・・何それ？」

うめくように香織が呟く。

香織「メルーサの仕業ね」

バロウズは言葉を失い、その場で固まっている。

モニターからは盛んに響くアラーム音。

管制官らは全員、青ざめている。

森村、カメラマン、ディレクターも、

啞然としてモニターを見つめている。

○同・大型モニター
タイニーリップス「・・・仕方がない」

ガックリと肩を落とし、タイニーリップスは口を開く。

タイニーリップス「このまま、運命を共にします、・・・ミサイルと」

○同・管制室（夜）

絵理沙「ええっ?!」

全員言葉も出ず、ジッとモニターに目を向けている。

絵理沙「そんな！　どうにかならないの!」

○同・大型モニター

ジッとポッドを見つめ、タイニーリップスは静かに首を振る。

タイニーリップス「いや無理だ。どうにもならない」

○同・管制室（夜）

悲痛な声で絵理沙が叫ぶ。

絵理沙「ねえお父さん、何とか出来ないの?」
タイニーリップス（声）「いやあ、もはや、

何とも・・・しようがない」

管制室の人々は皆、黙ったままモニターを見つめている

絞り出すようにバロウズが口を開く。

バロウズ「残念だ、タイニーリップスさん。

私はあなたに、作戦を中止しろとは・・・
どうしても・・・、言う事が出来ない」

タイニーリップス（声）「分かっています。
当然ですよ」

香織、涙を堪えながら口を開く。

香織「こうなってしまったら、私からも願
するわ。あなた、どうか全世界の命を救っ
てあげて」

ジョセフも口を揃える。

ジョセフ「カール、故郷をを思い出しなさい。
人類をあんな目に遭わせてはいかん」

○同・大型モニター

大きなため息を吐き、タイニーリップスは答える。

タイニーリップス「いや・・、実を言うとね、僕も今回は虫の知らせというか、嫌な予感がしたんだ。みんなを呼んでおいてよかったよ。お陰でこうやって・・、別れの挨拶が出来るってもんだ」

○同・管制室（夜）

目に一杯涙を溜め、絵理沙は叫ぶ。

絵理沙「嫌！ そんなの嫌！」

全員何も言えずただ黙って俯いている。タイニーリップス（声）「皆さん、僕は幸せ者です。本当です。だってこの手で人類が救えるんですから。冗談抜きでこれほど運のいい男はいませんよ」

○同・大型モニター

タイニーリップス「さあ皆さん！ 笑ってください。笑顔で僕を送り出してください。僕もマスクの下では笑っています」

そう言い、指でニッコリ笑うジェスチャーをしてみせるタイニーリップス。すすり泣く絵理沙の声。

と、突然、森村が口を開く。

森村（声）「タイニーリップスさん！ タイニーリップスさん！」

○同・管制室（夜）

森村がモニターに呼び掛けている。

森村「私、朝のニュースを担当している森村と申します」

タイニーリップス（声）「ああ、いつも見えます。小林アナへの絶妙なツツコミ、いいっすね」

森村「ありがとうございます。しかも今回は取材までさせて頂いて」

タイニーリップス（声）「いええ、とんでもありません」

森村「私どもは以前より、タイニーリップスさんが異星人ではないかと推察していたのですが、やはりそれは事実だったのですね」
タイニーリップス（声）「ええ。おっしゃる通りです。僕は遠い星からやって来ましたが」
森村「それで、最後に一つ、お願いがあるんですが」

タイニーリップス（声）「お願い？」

森村「・・・お顔を拝見させては、いただけないでしょうか？」

○同・大型モニター

タイニーリップス、当惑気味に、
タイニーリップス「・・・えっ？」

○同・管制室（夜）

森村「私たちは、人類を救うヒーローの素顔が知りたいんです」

○同・大型モニター

タイニーリップス、そわそわしながら、
タイニーリップス「いや・・・私の顔なんか」

○同・管制室（夜）

森村「お願いします、そのマスクを取って、今、笑っているとおっしゃったそのお顔を、見せてはくさいませんか？」

タイニーリップス（声）「・・・でも」

森村、必死に食い下がる。

森村「このままでは私たち、どこの誰かも知らないまま、ヒーローを見送ってしまう事になります。それじゃ切な過ぎるじゃありませんか！ だから、せめて最後に、一目でいいから、そのお顔を！」

ディレクターも駆け寄って来る。

ディレクター「お願いします！」

カメラマンもグッとカメラを近づけ、訴える。

カメラマン「是非、写させてください！」
黙って聞いていたバロウズも口を開く。

バロウズ「タイニーリップスさん。私からも
お願いしたい。でなければ、我々が笑顔で
送り出そうにも、肝心のあなたが本当に笑
っているかどうか、分からないではありません
せんか！」

管制官A「声を上げる。」

管制官A「お願いします！」

管制官B「見せてください！」

管制官C「英雄の笑顔を！」

○同・大型モニター

黙って聞いていたタイニーリップス、
ようやく決心を固めたように頷く。

タイニーリップス「そうですか・・・、分かり
ました。こんな顔でよろしければ」

タイニーリップス、マスクに手を掛け、
外し始める。

○同・管制室（夜）

全員息を呑みモニターを見つめている。
絵理沙もジッと見ている。

○同・大型モニター

タイニーリップスのマスクが外される。
中からニッコリと微笑むイケメン白人
男性、カールが現れる。

涼しい眼、キラリと光る白い歯、透き
通るようなバリトンボイスでカールは
口を開く。

カール「私がタイニーリップスこと、カール
・エルマンです」

○同・管制室（夜）

思わずどよめきが起こる管制室。
感極まった声で森村が声を上げる。

森村「ステキ！ やはり想像通りでした！

私、ずっとタイニーリップスさまって・
トム・クルーズやブラッド・ピットのよう
な方だと思ってました！」

ディレクターとカメラマンも叫ぶ。

ディレクター「ありがとうございます！　あ
なたこそ、本物のヒーローです！」
カメラマン「絵になる男とは正にこの事だ！」

○同・大型モニター

カール「いやいやいや、言い過ぎですよ」

カール、ゆっくりと敬礼をし、

カール「では皆さん・・・、どうかお元気で」

○同・管制室（夜）

急に姿勢を正すバロウズ。

管制官らも背筋を伸ばしている。

全員、感涙にむせびながら笑顔を作り、
直立不動で恭しく敬礼を返している。

森村やディレクター、カメラマンも涙
に濡れた笑顔でモニターに向かい敬礼
を始める。

香織とジョセフも涙で手を振っている。
が、突然、絵理沙が叫ぶ。

絵理沙「違うっ！」

絵理沙は声を上げる。

絵理沙「あれはお父さんじゃない！」

思わず絵理沙に目を向けるバロウズや
管制官ら。

森村もキョトンとしている。

森村「・・・えっ？」

絵理沙「本当のお父さんじゃない！」

森村「・・・どういう事？」

絵理沙は泣き叫びながら訴える。

絵理沙「本当のお父さんは、もつとカッコ悪
くて醜い、カエルみたいな人です！」

森村、ふいに事態を飲み込めたように
頷く。

森村「ああ・・・カエル化現象」

そして、絵理沙に優しく言う。

森村「絵理沙ちゃん、確かに普段のお父さん
ってウザくてだらしなくて、娘にとっては
下着も一緒に洗いたくないカエルのような
存在かも知れないけど・・・でも、あれが
本当の父親の、真の男の姿なのよ」

絵理沙「そうじゃない！ 例えで言ってるんじゃないの！ 本当にお父さんは・・・、カエルなんです！」

森村「いいえ、絵理沙ちゃん。彼こそ理想の父親。真正銘のスーパーマンよ」

絵理沙「違う！ そうじゃない！ そうじゃないの！ 何べん言ったら分かるの！」

ふいに絵理沙、モニターに向かい、

絵理沙「お父さん！」

○同・大型モニター

絵理沙の声が管制室に響く。

絵理沙（声）「本当の顔を見せて！ ねえ、お父さん！ その着ぐるみを脱いで！」

カールは黙って微笑んでいる。

○同・管制室（夜）

絵理沙「お父さん！ 今こそ全世界に披露するの！ 誇り高きフロゲリアンの姿を！」

○同・大型モニター

カールは画面の向こうから絵理沙を見つめ、心から幸せそうに笑っている。

と、いきなりブラックアウトする画面。

絵理沙（声）「あ・・・」

○同・管制室（夜）

愕然とモニターを見つめる絵理沙。

○漆黒の宇宙

暗闇に包まれた宇宙空間に、音もなく眩い光が走る。

○同・管制室（夜）

バロウズや管制官、森村やスタッフ、皆無言で上空を仰ぎ、敬礼をしている。ジョセフも香織も黙って天を見上げている。

絵理沙だけが一人、泣き崩れている。静かな管制室の中でいつまでも。

○エルマンクリニック・外観

晴れ渡る空の下、聳え立つビル。

屋上にはサムズアップでニコリ笑う
ジョセフの広告写真が飾られている。

○同・ロビー

玄関には「本日休診」の札。

中から森村の声が漏れて来る。

○同・待合室のテレビ画面

にこやかに微笑むカールの巨大パネル
がスタジオに飾られ、その前で切々と
森村アナが語っている。

画面下には「タイニーリップスさん、
宇宙に散る」のテロップ。

森村「と言う訳で、タイニーリップスこと、
カール・エルマンさんは、自らの命と引き
換えに我々人類を救ってくれました。しか
し、相変わらずこの地球が愚かな戦争や環
境破壊等で徐々に蝕まわれつつある事には
何ら変わりはありません。私は今こそもう
一度、人類は己の行為を顧みる必要がある
のではないかと強く思う次第であります。
以上、森村がお伝えいたしました」

深々とお辞儀をする森村。

隣では沈痛な面持ちで小林アナが目を
伏せている。

小林「氏のご冥福をお祈りいたします」

と、画面が切り替わり、山崎キャスタ
ーが元気一杯に登場する。

山崎「続いて、お天気です！」

○同・待合室

パジャマ姿のまま、カエルのジェセフ
がソファーに寝ころび、ぼんやりとテ
レビを眺めている。

ジョセフ「まあ・・、こんなもんか」

リモコンを取り、ため息混じりにジョ
セフはテレビを消す。

ジョセフ「結局、カイザーが介入していた件は一切触れる気なしか」

ジョセフ、ふと窓辺に行き、外を見ながらしみじみと呟く。

ジョセフ「・・・いい天気じゃのう」

と、背後で恭子の声。

恭子「お父さん、そんな姿で外を見てたら、隣のビルから覗かれちゃうわよ」

ジョセフ「ああ？ いいじゃないか、休みの時くらい」

恭子「どうするの？ 某週刊誌の記者だったりしたら、有名クリニック、整形失敗！

なんて砲撃をされちゃうかもよ」

ジョセフ「あ、そりゃいかな」

ジョセフ、そそくさと窓辺から離れる。同時に自動ドアの開く音と香織の声。

香織「こんにちわ」

入り口に香織と絵理沙が立っている。

絵理沙は顔が隠れるほど大きなマスクを着け、サングラスまで掛けている。

恭子、二人を見るなり目を輝かせ、

恭子「ヤダー香織さん、久しぶりーっ」

香織「ヤダー恭子さん、元気だった？」

恭子「元気元気！」

二人は手を取り女子高生のように足をバタつかせ、喜び合っている。

そんな二人を尻目に、心配そう絵理沙に歩み寄るジョセフ。

絵理沙がポツリと口を開く。

絵理沙「ダンケ・・・」

親指を立て、微笑むジョセフ。

ジョセフ「大丈夫かい？ 絵理沙」

黙って頷く絵理沙。

ジョセフ「そうか・・・、そりゃよかった」

ジョセフ、香織に向かい、

ジョセフ「で？ わしに頼みとは？」

香織、肩を竦め、

香織「あっ・・・、私じゃないんです」

ジョセフ「ほう？ それじゃ」

絵理沙に目を向けるジョセフ。

香織、絵理沙をうながす。

香織「ほら、ちゃんと自分で言いなさい」

絵理沙「・・・」

香織「・・・ほら」

絵理沙、ようやく決心を固めたかのよう
うに口を開く。

絵理沙「おじいちゃん」

ジョセフ「ん？」

絵理沙、ふいにマスクとサングラスを
外し、ジョセフに訴える。

絵理沙「私の着ぐるみも、作ってほしいの！」

絵理沙の顔は以前より遥かに目や口が
大きくなり、すっかりカエル化が進ん
でしまっている。

思わず驚きの表情を浮かべるジョセフ。

ジョセフ「・・・どうしたんじゃ？ 絵理沙、
その顔」

絵理沙は黙っている。

ジョセフ、絵理沙をジッと見つめ、念
を押すように訊ねる。

ジョセフ「整形じゃなくて？」

絵理沙「・・・」

ジョセフ「着ぐるみの方なのか？」

絵理沙、こくりと頷く。

ジョセフ「・・・分かった。任せなさい！

以前の絵理沙と、寸分変わらぬ着ぐるみを
作ってあげよう！」

と、急に口を尖らせる絵理沙。

絵理沙「ヤダ！ もっと美人に作って！」

大笑いをするジョセフ。

が、ふいに真顔で絵理沙に訊ねる。

ジョセフ「ただ絵理沙。もう人間でいるの、

止めたのかい？」

絵理沙「だって・・・」

絵理沙、キツパリと言い切る。

絵理沙「もったいないんだもん。折角授かつ

たフロゲリアンのパワーを、そんな事に使

っちゃったら」

一瞬、驚きの表情を浮かべるジョセフ、
が、すぐに感慨深そうに呟く。

ジョセフ「そうか、ついに絵理沙もわしらの仲間入りって訳か」

そんな二人をジッと見つめていた恭子、ふと絵理沙に声を掛けて来る。

恭子「絵理沙ちゃん・・・、ちょっといい？」

絵理沙「えっ？ なに？」

恭子「私の秘密、知りたくない？」

絵理沙「秘密？」

恭子「見てて」

恭子、いきなり首の後ろに手を回し、ベリベリっと顔を剥がし始める。

絵理沙「ああっ！」

ソバージュ猫目ガエルそっくりの女性が絵理沙の目の前に現れる。

愕然とする絵理沙。

絵理沙「おばさん！ 整形じゃなかったの！」

恭子「実は、私も着ぐるみだったのよ」

絵理沙「じゃ、おばさんもお父さんやおじいちゃんと・・・、一緒に事？」

恭子「そして、これからは絵理沙ちゃんもね」

香織も目を見開き、驚いている。

香織「知らなかった・・・、全然」

肩を竦めジョセフがぼやく。

ジョセフ「やれやれ、わしや何の為に外科医になったんだか。ダーレも美容界のゴッドハンドを頼らんとはのう」

恭子「私ね、絶対絵理沙ちゃんも同じ道を選ぶと思ってた、私と・・・」

ケロケロと笑う恭子。

絵理沙「そうだったんだ・・・」

絵理沙もつられ、ケロケロと笑い出す。と、恭子、ふいに思い出したように、

恭子「あっそうだ！ 大変！」

絵理沙「えっ 何が？」

恭子「もう一つ秘密があったんだ」

香織「まだ秘密があるの？ 恭子さんに」

恭子「私じゃないのよ」

恭子は悪戯っぽく笑い、口を開く。

恭子「二人とも・・・、一緒に来て」

○同・再生医療外科

ドアを開け、長い通路を恭子が足早に歩いて行く。

絵理沙と香織、少し遅れてジョセフが後を付いて行く。

振り向きながら恭子、絵理沙と香織に語り掛ける。

恭子「お二人とも、私が長年再生医療に取り組んで来た事は、ご存知よね」

香織「もちろん」

恭子「どんな内容かは知ってる？」

絵理沙「失った体を取り戻す医術でしょ？」

恭子「そうそう」

香織「でも、それって限界があるんじゃない、完全に失ってしまったら、もう」

恭子「確かに全く無くなってしまったら神様でもない限り、もう取り戻す事は出来ないけど。でも極端な話、生きてる細胞が一つでも残っていれば大丈夫なのよ。だって」

絵理沙「だって？」

恭子「私って、神様の次だから」

恭子、自信タツプリに言い放ち「再生医療ラボ、関係者以外立ち入り禁止」と書かれたドアの前で立ち止る。

恭子「実を言うと、今朝意識が戻ったばかりりなの」

絵理沙「・・・意識？」

香織「何の？」

○同・再生医療ラボ内

恭子、ゆっくりとドアを開け、絵理沙と香織に手を差し伸べる。

恐る恐る中を覗き込む二人。

室内は物々しい機器で埋め尽くされている。

ふと中央の巨大ガラス水槽に目が行く絵理沙と香織。

内部は液体が満たされ、その中に沢山の管に繋がれたカエルの生首のような物体が浮かんでいる。

生首は物音に気付いたのか、液体の中をユラユラと振り返り、絵理沙と香織に声を賭けて来る。

生首「・・・やあ」

一瞬、何が起きたのか分からない表情で生首を見つめていた絵理沙と香織、突然悲鳴を上げ、叫ぶ。

絵理沙「お父さん！」

香織「生きてたの！」

ニヤリと笑うカールの生首。

思わずジョセフが口を挟む。

ジョセフ「笑うのはよしなさい。不気味じゃ」

カール「御挨拶だな、実の息子に」

啞然として絵理沙が訊ねる。

絵理沙「一体・・・、どういう事？」

ジョセフ「つまりはな・・・、こういう事じゃ。

こいつ、事もあるうに、あの猫用ポッドに頭だけねじ込んで脱出しおったんじゃ」

香織「頭だけ？」

カール「体は吹き飛ばされちゃったけどね。でもあのポッド、性能だけはちゃんとしていたらしく、お陰で無事帰れたよ。その点ではメルーサも・・・、良心的だったね」

香織、呆れ顔で涙を浮かべ言い放つ。

香織「全く・・・、どこまでお人好しなのよ」

突然、水槽に走り寄る絵理沙。

絵理沙「お父さん！」

絵理沙、水槽に抱き着き、激しく泣きじゃくり始める。

絵理沙「よかったあ、本当によかったあ」

カール「御免ね・・・絵理沙」

カールも涙ぐんでいる。

が、ふと絵理沙の顔の変化に気付き、心配そうに訊ねる。

カール「あれ？ 絵理沙・・・、その顔」

絵理沙「えっ？ 何？」

カール「言っているのかな・・・、何て言うか、

また僕に似て来ちゃった気がするけど」

絵理沙、嗚咽混じりに笑顔で答える。

絵理沙「お父さん・・・、私、決めたの」

カール「何を？」

絵理沙「私もお父さんみたいに、着ぐるみを着る！」

カール「何だって！」

思わずゴボゴボと泡を吹くカール。

絵理沙「私、これからはずっと、着ぐるみを付けて生きて行く！」

カール「・・・」

絵理沙「でも・・・」

カール「・・・」

絵理沙「いつかきつと・・・」

絵理沙、力強く言い放つ。

絵理沙「着ぐるみなしで、素顔で私、堂々とこの世界を歩いてみせる！」

カール「・・・」

絵理沙「フロゲリアンとして」

カール「・・・」

カールは無言で絵理沙を見つめている。そして力強く泡を吹き、断言する。

カール「ああ！ 絵理沙なら出来る、きっと出来る。だって、絵理沙は強い子だもの。お父さんよりずっと」

絵理沙、涙を浮かべ大きく頷く。
香織の目からも涙が溢れ出している。

ジョセフや恭子も目頭を熱くしている。
と、絵理沙、ふいに心配そうにカールに訊ねる

絵理沙「だけど・・・お父さん」

カール「ん？」

絵理沙「元に・・・戻れるの？」

カール「え？・・・」

カール、不安げに首を傾げ、

カール「さあ・・・？ どうなんだか」
自信満々に恭子が答える。

恭子「大丈夫、大丈夫よ。ほら、よく見て、すでに組織が再生し始めているでしょ？」

水槽を覗き込む絵理沙。

見るとカールの首の下から微かに手や足のような物が生えている。

絵理沙「あ、ホントだ！」

ジョセフがニヤニヤしながら絵理沙の
耳元で囁く。

ジョセフ「ほら、歌にもあるじゃろ」
絵理沙「歌？」

突然、お玉杓子は蛙の子のメロディー
で歌い出すジョセフ。

ジョセフ「それが何より証拠には、やがて
手が出る足も出る」

思わずゴボゴボと泡を吹くカール。

カール「親父いゝ」

――終わり――